

2016 年度  
「教員研修会」・「FD 研究会」  
「学外 FD 関連研修会 参加支援」  
報告書

佛教大学 教育推進部 教育推進課

## 巻頭言

『2016年度「FD研究会」「学外FD関連研修会参加支援」報告書』発刊にあたって

西川 利文

このたび、2016年度のFD研修に係る活動をまとめましたので、ご高覧いただければ幸いです。

2016年度は、例年「FD研究会」として開催している企画を「教員研修会」として開催し、多くの先生方にご参加いただきました。

教員研修会はメインテーマを「成績評価」とし、学士課程教育の充実、教育の質保証が問われる昨今、本学としても成績評価の在り方を検討しました。学生がより意欲的に学修できるよう、成績評価をはじめ授業運営の改善に積極的に取り組んでいきたいと考えておりますが、2016年度開催した「教員研修会」は、まさにそのスタートラインに立つことを狙いに開催いたしました。

研修会においては「今、大学に求められる成績評価とは」をめぐって、5名の先生方に事例報告をしていただき、非常に有意義な研修会となりました。先生方におかれましては、ぜひ一度ご自身の授業を客観的に観ていただき、課題点等を洗い出してみてください。成績評価における教員の負担や学生の学修意欲の問題、また知識以外の部分をどのように評価するか、さらには他クラスとの評価のバラつきをいかに調整するか、などといった課題が見えてくるかと思えます。そして本報告書が、その解決のためのヒントとなればと思います。

さらに、今年度9月に開催しました「教員研修会」では、昨年度の内容をより深く掘り下げた内容で開催し、成績評価ツールの一つとして「ループリック」の作成を体験していただきました。今後さらに、成績評価をめぐる取り組みを継続できればと思っておりますし、学部レベルのFD活動でも取り組んでいただければ願っております。

また「成績評価」だけでなく、さまざまなテーマを設定してFD活動を展開していきたいと考えております。それについては、例年開催しております「FD研究会」等で取り扱っていきいたいと思っておりますが、先生方が普段悩んでおられることや工夫されていること等があれば、いつでも教育推進課のスタッフや学部の教育推進主任の先生等に、ご意見・ご相談いただければと思います。

なお、2016年度の「FD研究会」では、ティーチング・アシスタント(TA)の活用を広く周知すべく「TA活用事例報告会」を開催いたしました。大学院生の人数自体が減少傾向にある昨今ですが、その中で、TAとして授業に入っていただき、学部生の学修環境の向上に努めてくれている方々には本当に感謝しておりますし、先生方には今後もTA制度を活用いただきたいと願っております。

最後に、本学には、学外の研修への参加費あるいは交通費を助成する「学外FD関連研修会参加支援」制度があります。例年、利用者は10名前後で推移していますが、さらに多くの先生方に学外の研修会に参加して、他大学の先進的な取り組みを持ち帰っていただき、ご担当の授業等に反映していただきたいと思えます。先生方のFD研修会への積極的なご参加をお願いいたします。



## 目次

### 2016 年度教員研修会

第 1 回教員研修会<2016 年 9 月 15 日（木）実施> ----- 3

- 案内文書
- 発表概要
- 当日配付資料

### 2016 年度 FD 研究会

第 1 回 FD 研究会<2016 年 12 月 21 日（水）実施> ----- 53

- 案内チラシ
- 発表概要
- 当日配付資料

2016 年度 FD 関連研修会 参加支援報告書 ----- 65



# 教員研修会

## 「今、大学に求められる成績評価とは」

開催日：2016年9月15日（木）16：30～

会場：常照ホール（紫野キャンパス 成徳常照館5階）

N1-701教室（二条キャンパス 1号館7階）

司会：岡崎 祐司（教育推進機構長・社会福祉学部 教授）

パネリスト：伊藤 真宏（仏教学部 准教授）

作田 誠一郎（社会学部 准教授）

平田 豊誠（教育学部 准教授）

松岡 千代（保健医療技術学部 教授）

コメンテーター：原 清治（教育学部 教授）

参加者数：94名



平成 28 年 9 月 1 日

教員 各位

教育推進機構

## 平成 28 年度第 1 回教員研修会の開催について（ご案内）

標記の件につきまして、教職員連絡会等でご案内しておりましたとおり、平成 28 年 9 月 15 日（木）に、第 1 回教員研修会を開催いたします。

今回の教員研修会では、本学の教員がどのような「ねらい」や工夫をもって成績評価をしているか、またどんなことに悩み、それにどのような対処をしているか、それらを率直に出し合い、課題を共有し、今後の本学の成績評価のありかたを検討するスタートラインにたつことをねらいとしています。

そこで、今回は 4 名の先生方にパネリストとしてご登壇いただき、大学教育における成績評価をどのような視点から考えたらよいのか、大学教育がこのことをめぐってどのような動向にあるのかを一緒に検討したいと思います。

つきましては、下記の通りご案内いたしますので、ご参加ください。

なお、出欠確認のため当日は職員証をご持参くださいますようお願いいたします。

### 記

日 時：平成 28 年 9 月 15 日（木）16：30～18：00（16：00 より受付）

会 場：常照ホール（紫野キャンパス 成徳常照館 5 階）  
N1-701 教室（二条キャンパス 1 号館 7 階）※TV 中継

テ ー マ：今、大学に求められる成績評価とは

司 会：岡崎 祐司 先生（社会福祉学部 社会福祉学科 教授）

パネリスト：伊藤 真宏 先生（仏教学部 仏教学科 准教授）

作田 誠一郎 先生（社会学部 現代社会学科 准教授）

平田 豊誠 先生（教育学部 教育学科 准教授）

松岡 千代 先生（保健医療技術学部 看護学科 教授）

コメンテーター：原 清治 先生（教育学部 教育学科 教授）

以上

教育推進部 教育推進課  
担当：水谷（内線 2333）

# 平成28年度 第1回教員研修会

## 1. 開催概要

日時：平成28年9月15日（木）16：30～18：00（16：00より受付）

会場：常照ホール（紫野キャンパス 成徳常照館5階）  
N1-701教室（二条キャンパス 1号館7階）※TV中継

テーマ：今、大学に求められる成績評価とは

司会：岡崎 祐司（教育推進機構長・社会福祉学部 教授）

パネリスト：伊藤 真宏（仏教学部 准教授）  
作田 誠一郎（社会学部 准教授）  
平田 豊誠（教育学部 准教授）  
松岡 千代（保健医療技術学部 教授）

コメンテーター：原 清治 先生（教育学部 教授）

参加者数：96名

## 2. はじめに：岡崎 祐司（教育推進機構長・社会福祉学部 教授）

本日の流れ：

主旨説明の後、パネリストの先生方から授業での取り組みについて報告を頂いた後、原先生から発表者への質疑を含めたディスカッションを行ない、内容を深めていく。

趣旨：なぜ、「成績評価」を議論するのか。

- 我々に求められている学士課程教育の充実、学位の意義、教育の「質保証」
- 入学者の学力格差、学力低下に直面している←基礎学力調査
- 教育の成果をあげるために→シラバスの整備、授業の工夫

……更に重要なことは「成績評価」、学修成果の評価

学位を与えるという事は、学位を取得した学生に学修成果があつて、教員がそれを評価できる、そのようなアセスメントがあることを意味している。授業コアとなる成績評価の重要性は当然問われてくるわけである。

- 成績評価の厳格化、GPA 導入
  - …「試験の評価を厳しくすればよい?」「厳しくしたら落ちる学生が増える」
- 成績評価は学生にとって自己の学修を振り返るものではなく、「単位がとれた」or「落とされた!」といった心象が強い
- 我々の教育の質との関係

今後、科目レベルの「成績評価」、教育課程の「成績」分析は、学習成果の評価方針(アセスメント・ポリシー)を作成する際に必要な情報となる。

しかし、GPA にしてもアセスメント・ポリシーにしても、大学で教育を受けた者が、社会ですぐに実践できる力を身に付けているということだけではなく、5 年後、10 年後、或いは 20 年後に、大学での学修が生きてくるということもあるので、長いスパンで見なければならぬ。それを踏まえた、GPA やアセスメント・ポリシーが求められる。

また、急速な大学改革の潮流に押されながら、次々に打ち出されてくる種々のシステム、スキームをよく理解できないまま受け身で対応を続ける(反応する)という姿勢にも疑問が残る。佛教大学で学生をどのように育て、その成績の評価の在り方をどうしていくか、主体的に、議論をしていく必要がある。

#### 成績評価をめぐる悩み

事 例：「社会福祉原論 2H」

系 列：学部基幹科目

登録人数：106 人(主に 2 回生)

曜日講時：木曜 4 限

授業の概要：この授業は社会福祉学部の学部基幹科目であり、必修科目である。社会福祉原論では、社会福祉の目的、理念、社会的役割や使命を人権保障、権利の視点からとらえること、社会福祉の歴史的形成過程を理解すること、主体、方法や分野といった基本的事項を理解すること、現行制度や現場がかかえる問題点を当事者の立場にたって理解することなどが主な学習内容になる。「社会福祉原論 2」では、主に (1) 社会福祉の歴史をつかむために、人間社会が貧困・生活問題にどう対応してきたか、(2) 人権、権利の視点から社会福祉をとらえる、(3) 社会福祉の相談援助機関とサービス供給体制などその運営システムの基本がどうなっているか、を学ぶ。講義による説明だけではなく、受講生にも主体的に考えてもらうため質問をなげかけ、コメントの記述を求め、それらを教材としても活用する。到達目標に達するために、授業の復習はしっかり行ってほしい。受講生が復習していることを前提に授業を進める。

なお、中間段階で試験を行う。授業のなかで学生のキャリア形成に関する講義を一回程度を行う。三分の一以上、欠席している場合は、期末試験を受験する資格はないので注意すること。到達目標：小学校教員として必要な理科における学習内容の知識や技能を身につけ、自ら実践することができる。学習指導要領と理科学習論に基づいた授業設計を行い、学習指導案を作成することができる。

- 到達目標：(1) 社会福祉の歴史的形成過程について、自己責任型対応から社会問題認識、公的責任へ、という流れを説明できるようになる。
- (2) 憲法の意義をふまえ、人権と社会福祉の関係について、説明できるようになる。
- (3) 社会福祉の運営に関して、相談機関の役割と社会福祉サービスの供給の基本原則について説明できるようになる。

成績評価の基準：定期試験(教室)…60%  
授業内課題……40%

これまでの、社会福祉原論

- 受講生の福祉観、社会福祉理解の基本になる内容。今後の専門科目、実習、演習の学修の基幹になる科目。しっかり理解してほしい。
- しかし、期末試験(教室、論述問題)において到達目標に達しないものが年々多くなる。
- 「理論的に記述する」ことができていない答案が多くなってきた。

なぜ、不合格なのかが、わからない

- 不合格の学生、ぎりぎり合格の学生は、実は「この答案で十分」だと思っている。なぜ、この点数なのかが、理解できていない。
- 不運、「岡崎先生に落とされた」「岡崎先生は厳しい」
- 教員の成績評価基準と学生の「通るだろう」、「なんで落ちたのか」という認識のズレ
  - ズレを放置するのではなく、わかってもらう必要がある。

成績評価基準の明示と中間試験の実施

- 中間試験の実施
  - 採点とルーブリック評価をつけて返却
  - 希望する学生には個別にコメント
- 評価基準を実際に理解してもらう
- 期末試験(教室試験) 前の授業で
  - 学習のポイント(振り返り)
  - 成績評価基準の説明と注意事項

以上のような取り組みをしているが、それが有意義なものかどうかは、自分の中ではまだ検証ができない状態である。

### 3. 事例報告

#### 報告1：平田 豊誠（教育学部 准教授）

開講科目：「初等理科教育法」 ※免許必修科目

登録人数：70人程度(ほぼ毎回全員が来る)

曜日講時：木曜3限

授業の概要：小学校理科教育の理論と実践について授業を進めます。A区分：物質・エネルギー（エネルギー，粒子），B区分：生命・地球の観察や実験の授業を取り上げ，授業づくりの視点や方法について学んでいきます。安全な観察・実験の方法を学びつつ，学習指導案を作成し模擬授業を実施していきます。

到達目標：小学校教員として必要な理科における学習内容の知識や技能を身につけ，自ら実践することができる。学習指導要領と理科学習論に基づいた授業設計を行い，学習指導案を作成することができる。

成績評価の基準：定期試験(教室)…35%

授業内発表……15% 模擬授業等

授業内課題……50% 毎回の課題、学習指導案等

#### 授業と評価

授業設計と評価計画を個人的には重要視しており、評価の実施と授業の展開が必ずリンクすることを心がけている。

#### 講義概要

前半の授業編では90分の授業のうち最初の10分は振り返りを行い、最後の10分は1日の振り返り課題（2～3問）をする。間の70分で実技が入ってくる。

毎回の授業内容

回	内容
1	ガイダンス 小学校理科の現状
2	小学校理科の学習内容と目標
3	観察・実験での安全指導
4	小学校理科の指導法 エネルギー領域
5	小学校理科の指導法 粒子領域
6	小学校理科の指導法 生命領域
7	小学校理科の指導法 地域領域
8	理科学習の評価
9	理科学習論と授業づくり
10	学習指導案 書き方
11	学習指導案 作成
12	模擬授業 1 指導技術
13	模擬授業 2 授業展開内容
14	ICT の活用、理科室経営
15	まとめ

小レポート課題等が 4 回ほど出る。

グループでの課題等が出る。

グループでの指導案作成と模擬授業・討論

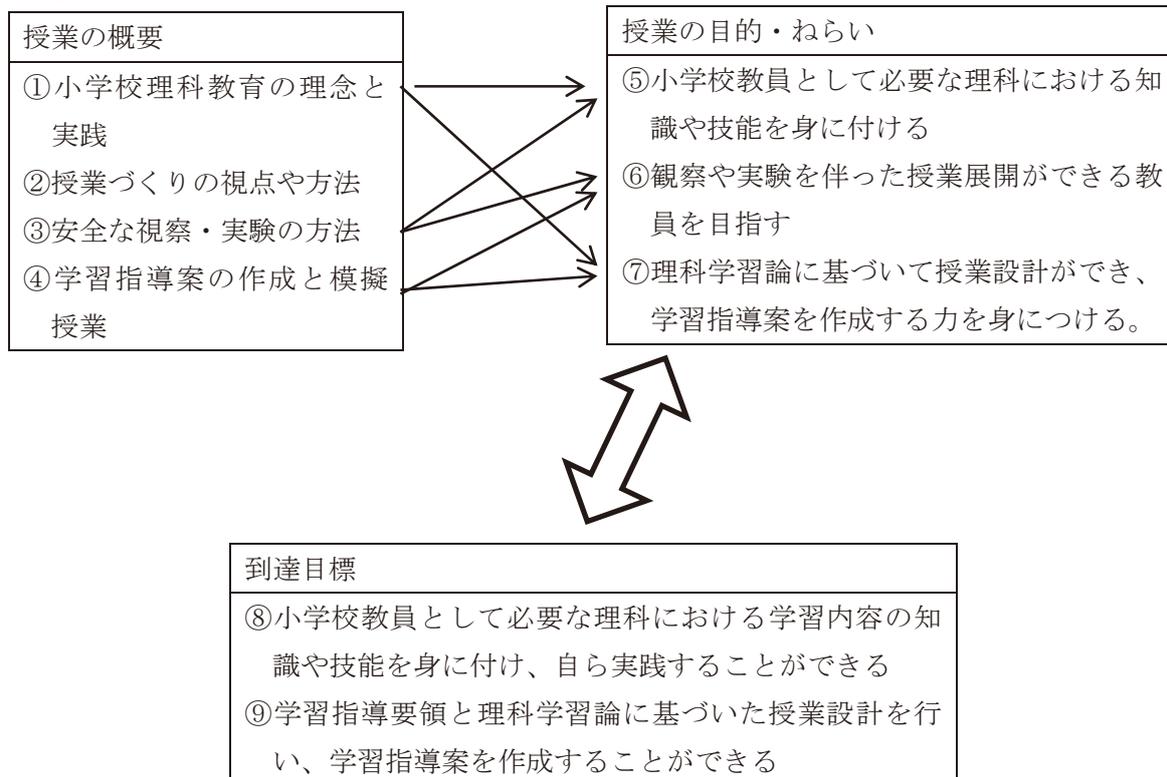
前半(2~8) : 技能編

中半(8~10) : 学んだこと +  $\alpha$  調べたことで発表

後半(10~15) : 調べ方、学んだことをふまえて、理科の授業をどのように展開していかなければならないか(指導案)など、実践で後半を設定している。

20 分の授業を 2 回、通しの 45 分の授業を 1 回。それを振り返り、討論などを行う。

## シラバス



- ⑤達成にむけて：毎回の振り返り課題と授業開始時の前時の復習課題、各領域の小レポート4回
- ⑥達成にむけて：2～7回目にかけての簡易実験及び実技の実施
- ⑦達成にむけて：班別課題としての授業論の調査・発表、指導案作成と模擬授業、班別討議

## 授業風景(動画)

この授業は14回目の授業(総まとめの1回前)で、学生たちが実際に模擬授業をしていく授業である。私が話すのは最初の5分、この5分間で今日の授業の趣旨を説明する。

学生達が授業を考えてやっている段階で、ほぼ完成している。授業を作ることができているということでは、達成しているとみてとれる。そこで評価をしていき、点数化していく。学生達は色々な道具等を使って、学生達なりに工夫して授業を行なっている。これまでの授業のエッセンスを取り入れて授業を作っているかどうかで達成度合いが判断できる。模擬授業の後、残りの45分間で学生達がそれぞれ、良かった点、悪かった点などをまとめて発表する。これは14・15コマ目に行う。発表の際も、気付いた点は全てメモをとらせ、提出させている。そして、次回の授業までに自分が大事に思っていることの理論をкаいつまんで説明してくださいという内容で課題を出す。提出された課題と回収したメモを見比べることで理解しているのか判断できる。

以上のように、発表するだけでなく、発表を聴いて全体が理解できるような工夫をしている。

## テスト問題

- (1) 現行の小学校学習指導要領，小学校学習指導要領解説理科編およびテキスト（理科教育法）をもとに，小学校理科の学習における，「見通しをもつ」こと，「問題解決の能力育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことについて a 整理し説明しなさい。さらに，b 授業で取り扱った授業例をもとに具体的・簡潔に説明しなさい。
- (2) 理科教育法の授業における，模擬授業や指導案作成において，c 自身の担当した授業時の①本時の目標を観点別学習状況の評価の観点に d 関連付けて説明するとともに，②本時の指導過程（指導展開）を簡潔に述べ（枠等は適宜自分で作成・設定して書くこと），e 授業づくりにおける大切にすべき点についても述べよ。その際には，f 自身の担当した授業法の説明内容の比較検討を入れ込むこと（素朴概念，言語活動においても同様とする）。
- (3) 理科教育法の授業を通した，自身の学びと課題について説明せよ。

60 分で上記のボリュームはなかなか書けないが、しっかりと理解しているとちょうど 60 分で書ける。2 番は本当に理解していないと書けないので、客観的な数値として 2 番の問題は使える。

## 評価において留意していること

- 到達しているかどうかでみる
- チェックマンにならない
- 時間をかけすぎない
- ちゃんとした成果を出している学生を裏切らない
- 成績と評価を区別する

## 報告 2 : 作田 誠一郎 (社会学部 准教授)

開講科目 : 「文化・国際特殊講義」

登録人数 : 227 人

曜日講時 : 金曜 3 限

授業の概要 : 社会の動向を敏感に反映する青少年に注目し、彼らの社会関係や文化を中心に現代社会を考察する。

到達目標 : 青少年に関わる基礎的な理論や社会関係を知り、その知見から今後の社会事象に対する多角的な考察が行えることを到達目標とします。

成績評価の基準 : 定期試験(教室)・・・70%

授業内試験・・・・・・30%

初回の授業において、シラバスに沿って授業の目標や方法(成績評価も含む)について説明を行う。授業の到達目標という大まかな目標を提示して、それぞれの到達目標について説明をする。その時に、成績評価に関しても説明をしている。

### 授業風景(動画)

文化・国際特殊講義は、決まった授業内容というよりは、現在の新しい社会的なトピックを授業に取り入れながら講義を行なう授業である。

この動画で説明しているのは、医療化についてであるが、寝ている学生は実際のところ多い。やはり人数が多いのでどうしても、全体に集中をさせることが難しく、大人数講義の難しさを感じている。最近では、他の先生方の授業でも見受けられるように、メモをとらずにスマートフォンでスクリーンの画面を撮るという学生もいる。基本的に私の場合は、最初にレジュメを配り、穴抜きの方法で、そこでパワーポイントを埋めてもらう形で授業を展開している。以前は板書で全てを行っていたが、書くのが大変で、教員の意見が入ってこないという意見もあったので、パワーポイントと穴抜きのレジュメをバランスよく使って、説明を聞いてもらおうという形に授業は変化してきている。

### 課題

授業については、基本的に各コマにテーマを設定し、そのテーマに即した課題を授業の最後に示す。課題提出については、次回の授業終了時に集めている(当日の提出を認めない)。例)文化的接触理論(文化的同一化理論)の立場から、あなたの知っている事件または出来事を例に挙げ、その原因と犯罪について述べてください

### 課題に対する評価

各課題に対しては、A+～Cまでの9段階で評価している。(ペーパー指定)

裏面に、授業に対しての問題や、質問を書いてもらう。書いてくる学生がいると、次の授業の最初で学生に説明するなどをして、フィードバックしている。

#### 期末試験

学期末は 60 分の論述試験(2 問出題し 1 問を選択)を行い、各課題を含めて総合的に評価する。採点にはかなりの時間を要する。社会学の部位だけを覚えるのではなく、発想や思考というところも評価したいので、できるだけ論述の形を取っている。

#### 各テーマの課題および期末試験における成績評価の基準

- 課題に対する記述であるか
- 授業内容を踏まえた記述になっているか
- 客観的なデータ(授業で紹介した例も含む)をあげているか
- 倫理的に文章が記述されているか
- 独創的(自己の体験談も含めて)な記述であるか
- 授業の到達目標に対応しているか
- 誤字脱字がないか

#### 現状の成績評価の問題点

- 論述の場合、成績評価が課題の内容によって相対的にならざるを得ない。  
→課題内容のレベルを揃える。課題の回数を増やすことで平均的な評価とする。
- 成績評価に関わる学生への課題(理解度のチェック)は必要であるが、受講者数が多いため教員の負担は増加する。  
→我慢する?!課題内容の検討。個別のフィードバック。学習の促進(学習内容の復習および自主学习など)
- 授業内容に対する知識の修得も重視するが、学生自身の発想も重要であるため評価が難しい。  
→独創的な発想に対する得点をあらかじめ決めておき加点するなど。

### 報告 3 : 伊藤 真宏 (仏教学部 准教授)

開講科目 : 「法然の生涯と思想」 ※全学共通科目

登録人数 : 151 名(全て再履修)

曜日講時 : 月曜 5 限

授業の概要 : 春学期に学んだ釈尊の教えをふまえ、大乘仏教、浄土教思想、日本仏教などを概説した上で、法然の思想を、その生涯とともに把握する。

到達目標 : 法然の生涯と教えを学ぶことにより、建学の精神を理解する。

成績評価の基準 : 定期試験(課題)・・・50%

授業内課題・・・・・・50%

#### 授業風景(動画)

大人数講義であるが故に寝ている学生、イヤホンをしている学生、携帯電話が鳴ったら外に出て電話をする学生が一定数いる。中には体調が悪くて出ていく学生もいるため、基本的には止めようがない。講師が気付けないこともある。講義はそれぞれ板書、配布した資料、テキストを使って行なっている。私自身もこの授業風景の動画を見るまで後ろの現状を存じていなかったもので、大変ショックを受けた。

#### 学生の特徴

- 学籍番号順にクラス分けされているため、選択の余地がない  
→ 教員との相性がしばしば問題になり、講義に出たくなくなる学生がでてくる
- 一講目(朝)が苦手なため欠席しがちなため、単位を落としてしまう
- 大人数で基本真面目だが、ついつい陰に隠れて講義を聞かないという、学生個々の性格に起因する問題

#### 講義の特徴

- 佛教大学の建学の理念に関わるため、受講必須だが、好むと好まざるに関わらず受講することになるので、学習意欲にバラつきがある  
→ 好きではない講義
- 仏教に関わる内容のため、講義の話題が「死」とか「老」や、「煩惱」「愚」など、自分に向き合う重いテーマになりがち  
→ 面白くないという評価がしやすい
- 10 クラスの、難易度に差が出やすい

#### 方向性

- 出席は取る(代理出席をする者もいるので重視はしない)

- 寝てもいいがいびきをかくなと注意
- 試験に通れば合格
- 講義中に話したことが試験に書いてあれば、点数は良い
- 疑問点があればすぐに解決する(大人数だとなかなか質問しづらいので、授業外で聞く)
- 試験(レポート)は絶対放棄せず、できなくても受験せよと促す  
→未受験と0点の違い

#### 評価について

- テスト(レポート)は、やろうと思えばできる問題  
「法然の思想や生涯で、心にとめておきたい点を指摘し、その理由を述べよ」2,000字
- 評価の基準  
60=設問には答え、記述内容が間違っていない。  
70=模範解答ではないが概ね正解  
80=模範解答  
90=模範解答+ $\alpha$ 。完璧な解答  
そこから様々な要素を勘案して加点減点

#### 問題点

- 静粛性の問題
- スマホ・ケータイ(講義中に鳴らす人は減ったが、音楽を聴いている。でも単純に排除できない。最近の学生は、タブレットはもちろん、卒論までスマホで書いてしまう。
- 黒板の板書もスマホで撮る

今、自分が何をなすべき時かを再三伝えている。

大学の試験というのは自分がその講義の学習成果を自分自身で確認する場面。自分がその講義を受けてどれだけ理解したのか、或いはその資格を取れるだけのものを持っているのかを自分で確認する場である。

他人の出席や成績はまったく関係ないし、気にする必要もない。仮に他人のノートを借りたり、手を抜いたり、頼ったとしても、その時は上手く切り抜けて成績を取ったとしても、結局は、きっちりやらねばならないとき、逃げられないときが必ず来るので、その時のために今自分はやらなければならない。今なら失敗をしても、成績が悪くてもやり直せるのだから、今やらなければならないということを伝えている。

報告 4 : 松岡 千代 (保健医療技術学部 教授)

開 講 科 目 : 「老年看護方法論Ⅱ」 \* 濱吉講師、後藤助教の複数担当

授 業 形 態 : 演習

登 録 人 数 : 約 70 名

曜 日 講 時 : 火曜 4 限(1 単位 30 時間)

授業の概要 : 老年期に起こりやすい症状や高齢者のセルフケア能力について理解し、健康障害をもつ高齢者の看護に必要な知識や援助技術を習得する。また、健康障害を抱える高齢者の代表的な事例を取り上げ、老年期の特徴および対象の発達段階をとらえた健康障害の理解と、看護過程の展開方法について学ぶ。

到達目標 : 高齢者の特徴及び発達段階の特徴を考慮した看護援助と看護過程の展開について自らの力で実践し、導き出せる力を身につける。

成績評価の基準 : 授業内試験……90%

授業内課題……10%

授業概要

できるだけ事前学習をして授業に臨むようにさせている。技術演習の前には必ず web 教材を事前に見て事前学習してから技術演習に参加させている。

老年看護方法論Ⅱ(高齢者の看護)ということで、ライフケア・仏教といったテーマとの関係性もある。

回	内容	次回までの課題
1	老年症候群と看護ケア	
2	高齢者のエンドオブライフケア①	★エンドオブライフケア レポート課題提示 ・ナーシングスキル:褥創予防
3	演習①褥創予防ケア(体位交換)	★演習① 振り返りレポート ・ナーシングスキル:接触嚥下ケア
4		
5	演習②摂食嚥下機能の低下とケア	★演習② 振り返りレポート ・ナーシングスキル:排泄機能障害
6		
7	演習③排泄機能障害へのケア	★演習③ 振り返りレポート ・ナーシングスキル:関節可動域訓練
8	演習④ 介護予防ケア:関節可動域訓練等	★演習④ 振り返りレポート
9		
10	高齢者と家族への看護	
11	高齢者のエンドオブライフケア②	課題① 事例提示 →情報収集項目ピックアップ
12	看護過程展開 1 情報の整理と全体像	課題② 全体像整理

13	看護過程展開 2 分析と看護上の問題点抽出	課題③ 着眼点抽出と分析、 看護上の問題点抽出
14	看護過程展開 3 看護計画の立案	課題④ 看護計画立案
15	看護過程展開 4 平等等の説明、まとめ	★最終看護過程レポートとして仕上げ提出

看護過程展開 1～3 の特徴としてグループ学習をしている。

グループ学習の良い点

- 学生間での刺激にもなる
- 自分でなかなか自己学習ができない学生が、できる学生のやり方を見て、自己学習のヒントが貰える。

厳しい点

- 必修科目を1つ落とすと、実習にいけないので、留年になってしまう。  
→課題についても教員側がしっかりと評価をしないといけない。

授業風景(動画)

グループは6～7人で行なっている。3名の教員で全体を見ながら指導している。

11～15回のところで課題を設定しておき、授業外での学習を促している。

課題は各個人がグループ内で発表する。そうすることで、周りの人がどれくらい出来ているか、やってきているかを考えることができる。そして、そのグループの中で共有してきたことをまとめてグループとして発表し、全体での共有をする。このように、個人個人の学びがグループを経て、全体に行き渡るといような授業展開をしている。3人で巡回しているので、学生も寝ることはなく、課題もしっかりとやらないと、実習に影響するので非常に真剣に取り掛かっているように見受けられる。

成績評価：授業内課題のみ(定期試験なし)

- エンドオブライフケア 課題とレポート 20点  
課題：事前指示書の記載と家族・友人との話しあい  
レポート：終末期医療・エンドオブライフケア・死についての考察
- 看護技術演習  
振り返りレポート課題 各10点×4=40点
- 看護過程演習課題 40点

以前の成績評価における課題と改善点・工夫点

- レポートや看護過程記録の評価  
試験に比べて、主観的あるいは曖昧な評価になりがちで、さらに分担評価になると、担当者によって評価の観点が異なる場合がある。

→より客観的な評価指標が必要

→2014年度のFD研修にてシラバスや授業設計について学び、改善に取り組んだ

● 看護過程学習はグループ学習

・各学生がどれくらいグループ学習に取り組んでいるかよくわからない（看護にとってグループ活動はとても大切）

→何らかの形で評価できる方法はないか？

→評価の中に他己評価を導入（最高10点加点）

看護過程演習課題の評価観点

授業の最初に学生に提示している。それぞれの評価項目に対しての基準を表にしたもの。できるだけ数値を出して分かりやすくしている。

	優れている	標準的	不可
情報整理	<ul style="list-style-type: none"><li>・知りたい情報とその理由が具体的に記載されている。</li><li>・10個以上挙げている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・知りたい情報とその理由が記載されている。</li><li>・6個以上挙げている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・知りたい情報のみ記載されている。</li><li>・5個以下</li></ul>
全体像	<ul style="list-style-type: none"><li>・情報をカテゴリー分けして、見やすく箇条書きにて整理できている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・情報をカテゴリー分けして記載できている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・情報を羅列している。</li></ul>
着眼点・分析	<ul style="list-style-type: none"><li>・着眼点、関連するS/Oデータ、分析、看護上の問題にいたるまで漏れなく明確に記載されている。</li><li>・1個以上の着眼点に対する分析と看護上の問題点抽出ができている。</li><li>・得た情報やデータを科学的に根拠に基づいて分析できている。</li><li>・導き出した看護上の問題点のネーミングが分かりやすい。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・着眼点、関連するS/Oデータ、分析、看護上の問題全てが記載されている。</li><li>・1個の着眼点に対する分析と看護上の問題点抽出ができている。</li><li>・主観的に分析している個所が多く、科学的根拠に基づいた分析が少ない。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・関連するS/Oデータの整理ができていない。</li><li>・分析が主観的な内容のみに終始している。</li><li>・看護上の問題点が導きだされていない。</li><li>・導き出した問題点の意味が分からない。</li></ul>
看護計画立案	<ul style="list-style-type: none"><li>・評価しやすく具体的な長期・短期目標があげられている。</li><li>・具体的で個別誠のある看護計画が記載されている。</li><li>・誰でも計画を見れば実施できる内容が記載されている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・具体的な目標が挙げられている。</li><li>・長期目標と短期目標の違いが分かるように記載されている。</li><li>・具体的な看護計画が記載されている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・長期と短期目標が分けて設定されていない。</li><li>・評価できない内容の目標が示されている。</li><li>・看護計画に具体性がなく、一般的な内容のみが記載されている。</li></ul>

実施してみて

- 評価基準を初回授業で提示することで
  - ・学生、教員の両方が何を指すかを共有できた
- 評価基準がクリアになったことで
  - ・評価点がつけやすく、学生への説明の根拠が提示できるようになった
- グループ学習の他己評価を導入したことで
  - ・主体的に取り組む姿勢がみられ、学生の不公平感が払拭された

#### 4. コメント&発表者への質問：原 清治（教育学部 教授）

5人の先生方の報告を受け、どの先生も成績評価に苦慮されていることが分かった。その上で、私からの感想や報告者への質問をいくつか述べたい。

平田先生の報告について

教育学部の小学校教員の免許を取ろうとしている学生の必修科目である為、学生は授業を履修する意味というのを分かっている。授業運営のし易さで言えば、性格的にも規模的にもやり易い部類に入るだろう。平田先生は非常に学生の授業評価が高い先生だと思う。その理由としては、1回目から15回目までの授業を見たとき、学生に教える時間が、徐々に少なくなってきた点がある。最初の1・2回目は先生の話す時間は相当長い。ところが、最後の14・15回では、5分くらいしか話さないという。これは、教育学の世界では学生の主体性を前提とした授業の展開となっていることを表し、とても理想的で、教えるだけの授業からアクティブラーニング的な授業へ展開している例である。

平田先生への質問

(1)テスト問題の「(3) 理科教育法の授業を通した、自身の学びと課題について説明せよ。」の採点方法を伺いたい。

(2)また、評価には時間をかけすぎないという話もあった。レポート等を評価する場合は採点に非常に時間がかかると思われるが、どのように工夫されているか。

平田先生からの回答

(1)まず、15回目のまとめの授業の時に、今まで回収した小テストやレポートを全て返却している。そこで、これまで学んだことを30個書き出してもらい、その中から自分が最も学びに繋がったと思う5つを選択して、その理由を書かせるようにしている。また、それをグループで共有したり模造紙で資料を作ったりしている。

この問題では、15回の授業を振り返るという問題になっており、これまでの学びを振り返ることができて、きちんとメモとしてそれを残しているかということが試されている。

なお、定期試験は、紙媒体の資料のみ持ち込み可としており、スマートフォンやPC等は不可にしている。

(2)1～3回目の授業では、授業終わりに「理科の目標を書いてください」といった単純な記憶再生の問題を出題している。そして次の授業の最初に、同じ問題（あるいは $+\alpha$ ）を出題して覚えてきているかどうかを確認する。初期の頃はこのような記憶再生型の問題を出題するのだが、後半は、自分の解釈を150文字で書かせるといった問題を繰り返し出題

し、要点を端的に述べるトレーニングを積ませる。そうすると、段々と学生が提出したレポートが一定程度をおさえた内容になってくるので、採点作業をある程度省力化することができる。また、学生からレポートを回収する前に、書いてきた内容をグループ同士で共有し、評価し合うことをさせている。さらに、自分達が優秀と評価したレポートを上に乗せて回収させることで、少し効率化される。小論文についても同様に、なるべく採点に時間をかけないように心がけている。

発表に対する評価は、学生との話し会いの中でどれだけ到達目標達成しているかということを見ていくようにしている。最後にまとめて採点しようとする負担が大きいので、90分の授業時間内に評価し終えることができるものは、できるだけ授業時間内で終わらせるようにしている。

#### 作田先生の報告について

非常に大規模の授業であるので、工夫が難しい所だろう。課題の出し方では、課題をその時間に提出させずに、1週間を置いて提出をさせている。そうすることで長い時間振り返ることができる。このような方法は、学術的にも学生への配慮といった点からみても、とても大事なことである。

#### 作田先生への質問

(1) 1回目の授業で授業の目標や方法について説明する際に、どのように学生に提示をされているのか。70%が最後のテストで、30%が課題。その30%の細かい所は触れられているのか。評価の基準をどの程度提示しているのか。

(2) 課題に対する評価でA+からC-の評価の9段階の中で、9段階の評価は一般的に使われるが、220名のレポートを9段階で評価をするときは、かなりの時間がかかるとおもうが、どのような工夫をされているのか。

(3) 現状の成績評価の問題点として、課題を増やしたいのはやまやまだが、課題を増やすと教員自身の負担が増える。課題の回数を増やすことで平均的な評価とするということについて、少し詳細を伺いたい。

#### 作田先生からの回答

(1) 各課題の評価を若干ふまえて、例えば、目標等にどう対応していくか、文章はとぎれとぎれにならないような構成になっているか。あとは自己の体験もふまえているか、そういう点を加点して評価すると大ざっぱではあるが説明している。

(2) 小レポートなので、しっかり書けている学生とそうでない学生がはっきりと分かる分、評価はし易い。一目で全く書けていないものはC+からC-の評価を付ける。また、ある程度書けているレポートはA+からB-の6段階評価をしていくが、はっきりとした基準がな

く、相対的に評価せざるを得ないという現状である。

(3)評価のブレ防止のために、課題の回数を多めに設定している。それぞれの課題に対する評価は様々だが、平均すれば偏った評価にはならないのではないかとこの考えに基づいて実施しているのだが、やはりご指摘のとおり大人数講義なので教員負担もそれだけ重くなってきているので、あまり皆さんにおすすめするような内容ではない。さらに、学生にはフィードバックを 1 週間後にすると伝えているので、なんとか時間を見つけて採点をしているような現状である。

#### 伊藤先生の報告について

「10 クラスの難易度に差が出やすい」、これこそがまさにこれから向かっていく GPA を活用して、できるだけ各クラスの評価の不均衡をなくしていかなければならない問題である。ところが、GPA を導入すると必ずやらなければならないのが、GPA の学生への公開であり、例えば、伊藤先生の「法然の生涯と思想」は GPA は何点、という情報を学生に開示する必要がある。そうした場合、10 人の先生で同じ科目を担当した時にどのような課題を我々は抱えることになるか、考えなければならない。

また、伊藤先生が再履修クラスの授業運営に苦慮されている様子は先程の映像でも見せていただいたが、FD 的視点でこの問題を解決しようとするならば、学籍番号順にクラスが分かれているので、座席を学籍番号順で指定するという方法がある。これは意外に FD がやる基本攻略の 1 つで、そうすると後ろの方で寝ている学生も若干減るといふ報告もあるので、一度お試し頂きたい。

#### 伊藤先生への質問

(1)151 名も再履修の学生がいることに驚いた。一度単位を落としている科目であるから、さらにもう一度不合格にすることは非常に辛い作業だと思うが、そんな再履修科目を担当する時の先生の心構えや想いを伺いたい。

(2)成績評価は、定期試験の課題と授業内の課題とで 50 : 50 とされているが、これに何か理由や工夫があるのか。

(3)未受験と 0 点の違いについて、教務上の取り扱い上はよく分かるのだが、これを学生にどのように説明されるのだろうか。それによって学生の認識がかなり変わってくる。

(4)評価についても、完璧な解答でも 90 点。100 点はこの科目にはないのかどうか。例えば、これも GPA の議論をするときに、S、A、B、C、のときの“S”を作らない理由があるのかどうか。

#### 伊藤先生からの回答

(1)必修授業の再履修ということで、絶対に合格させないといけない講義と心得ている。

そのため、学生が書き易い設題、あるいは不正解になり難い設題にしている。とにかく卒業するために単位を修得してもらわなければならないと思っているのだが、学生は、この授業が必修授業（の再履修）であることの問題意識は希薄である。

また、未受験と 0 点の違いについては、未受験だと評価のしようがないので、どうしようもない。たとえ授業が理解できなくとも、あるいは出席しておらずとも、レポートを提出しさえすれば何か+になることがあるが、未受験だとどうしようもない。そういう話を学生に懇々と何度も説明し、何としても合格してもらいたいというこちらの意図や熱意を伝えるようにする。

(2) 基本的に私は主に期末テストで成績評価をするが、この授業については出席した人が得をするという意図を持って授業をしている。出席確認は授業内課題の提出をもって管理しており真面目に出席している学生が評価されるようにしている。成績評価の比率は、定期試験と授業内課題で 50:50 とシラバスに書いているのは、レポートの評価をベースとし、更に真面目に出席している学生が評価されるという意図がある。

(3) 完璧な解答を 90 点としている。そこから、論述が論理的なのか、字がきれいかなど加味すると 100 点はあり得る。

#### 松岡先生の報告について

評価基準を最初の授業で示すのは、アセスメント・ポリシーをしっかりと伝えているということである。秋田県の子どもたちの学力が非常に高い要因の 1 つとして、教師が各授業の冒頭に黒板の左上にその時間のねらいを黒板に貼ることや、書くということを徹底していることが挙げられる。このように、目的やねらいを明確に示してやると学習効果が非常に高まるという報告があるが、それと同様の効果があると思う。また、評価基準（ルーブリック）も非常に明確に示されている。

また、グループ学習の他己評価を取り入れている点は、これからの新しい評価論において重要なポイントとなるであろう。

#### 松岡先生への質問

(1) この科目は複数教員で担当されているので成績評価も複数人で分担されていると思うが、評価の観点が異なるという問題をどのようにクリアしているのかを伺いたい。

(2) また、必修科目を担当されているので、単位を落とした学生が進級できないケースがあるかと思うが、不合格の成績を付けるまでにどのような指導をされているのか。そして、不合格となった学生の反応などを教えて頂きたい。

(3) 司会をやったことが周囲から積極性があると評価されると仰ったが、評価論の中で、教育学の中では言われていることなのだが、一般的に他己評価をさせると、司会をやった子の評価は確かに高い。ところが、その司会の仕方によって、逆に評価が落ちるという傾

向もある。他己評価が悪い訳ではないが、司会をやった子が積極性があるというわけで必ずしも評価されるわけではない。これは最近の学生達の非常に大きな特徴かもしれない。

松岡先生からの回答

(1)演習というのは、白衣を着てベッドサイドに立って体を動かすということで、講義形式の授業とは様々点で異なるところがある。視聴いただいた映像は複数の教員が担当する授業であるが、必ず成績会議を設けて担当者間で評価基準を揃えるようにしている。

また、また、グループ学習の他己評価については、特に司会者は決めないようにしている。4回のグループワークの中で、一番グループに対して貢献できた人という意味合いで評価するようにしている。

(2)今までは、なんとか合格させるといったやり方をしていたが、命を預かる仕事につく学生達にはしっかりと勉強して欲しいし技術もつけて欲しいので、本当にそれが社会貢献になるのだろうか、ということも考えている。実は今回3名の学生が単位を落としているが、いきなり落とすのではなく、中間面接等の機会に警告をしており、ここで踏ん張らないと単位を落として留年になると伝えたくて落としたのが3名となった。その学生に事情を聞くと、「もともと看護師になりたくなかった」「親に言われて入学した」と言うが、こちらとしてはそのような気持ちで臨床実習にいつてほしくない。何より危険であることに加え、実際に患者と接していくうえでは失礼にあたる。そうした理由から、今回は学生にも理由をしっかりと説明し、結果として3名が不合格となった。

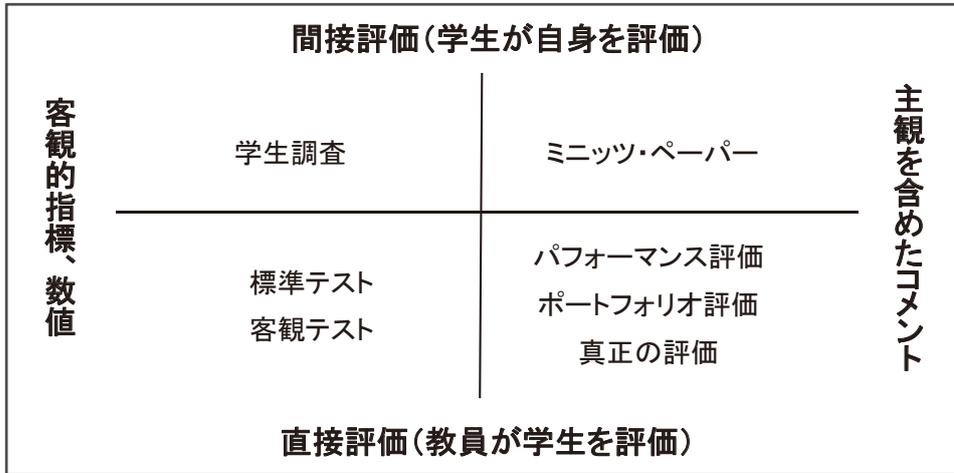
まとめ

今、ゆとり教育が方向転換し、ゆとりから脱する時代になってきている。こういう状況になると、ゆとり教育を導入した時と同じプロセスで、評価の考え方に関しては相当揺れることになる。当時、ゆとり教育が導入されたときに保護者からの疑問の声が一番多かったのは、相対評価ではなく絶対評価にすると、先生が“えこひいき”するのではないかという声であった。そういった問題が転換期には必ず噴出してくる。

今回も学習指導要領が変わり、今の中学校2年生くらいから、センター試験もなくなると言われている。新しい指導要領の中で、どのように評価論が変わるかというところについては、文科省が議論しているところである。それに伴って大学も勿論、柔軟に対応していかなければならないだろう。

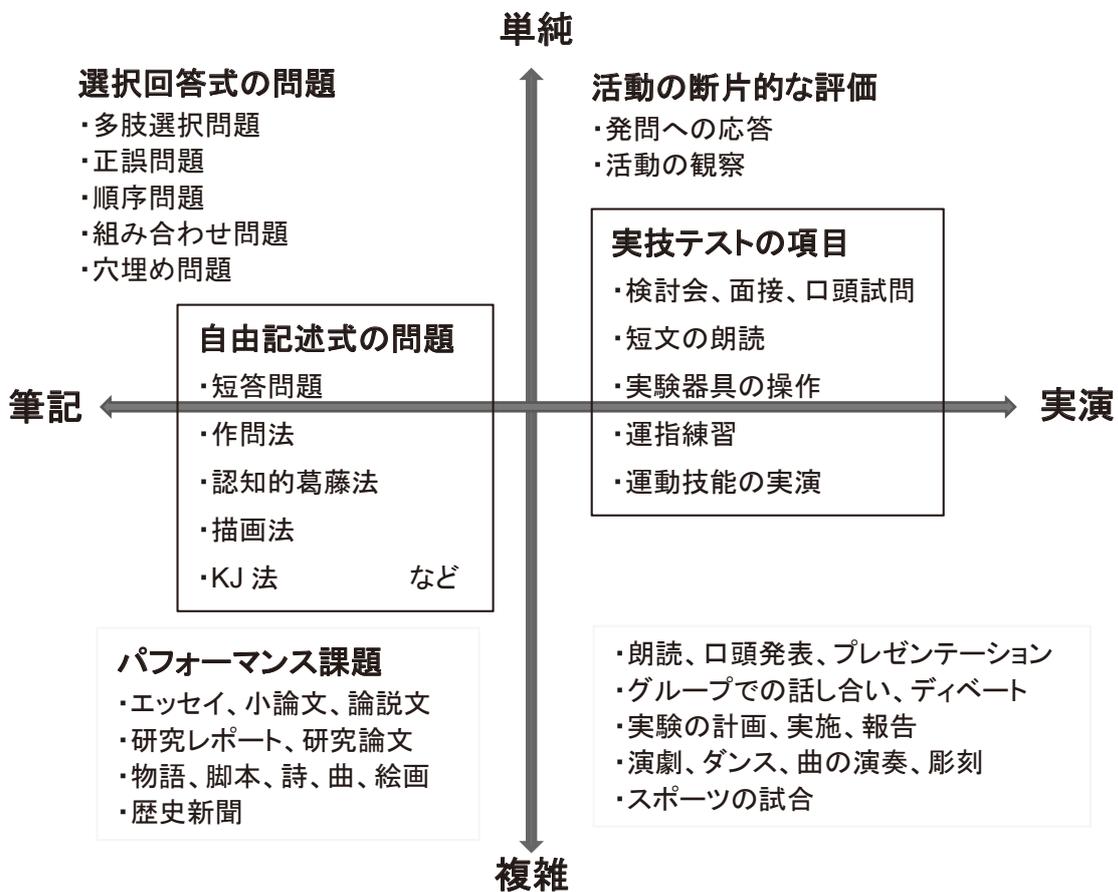
図1のような評価がおよそ一般的に考えられてきた大学における学習評価の在り方だと言われている。特に右下に位置するパフォーマンス評価、ポートフォリオ評価のあたりに比重が移ってきたという流れがある。

(図 1)



評価方法の組み合わせ

ポイントとなるのは、下図のパフォーマンス課題を学生に提示して、それを筆記やら実演やらで、総合的に評価をしていく。平たく言えば、評価を組み合わせで行うということに、今時流がある。



パフォーマンス評価とは何か

「パフォーマンス課題」によって学力をパフォーマンス(ふるまい)へと可視化し、学力を解釈する評価法

例)フィギュアスケートの採点方法

ジャンプの種類、回転、順番によって点数が異なる

→この点数の基準がルーブリック

これまでの成績評価の批判として

- ・科目者の主観だと批判された時、根拠を示すことが困難
  - ・複数科目担当の場合、評価軸がぶれてしまう
- 誰の目から見ても、同一の評価をする必要がある

## GPA/GPT

履修登録した科目の5段階評価(S・A・B・C・D)を4から0までの点数(GP:Grade Point)に置き換えて単位数を掛け、その総和(GPT:Grade Point Total)を履修登録単位数の合計で割った平均点がGPA

他大学の事例をみれば、GPAのアベレージが高い学生に履修制限の上限を少し緩和して、より多くの授業を履修させる工夫をしている。

また、奨学金を与えるとか、表彰制度をどうするのか、教員の評価基準を揃えるというところでGPAを利用しがちだが、使い方によっては、学修成果に貢献する可能性がある。

## アセスメント・ポリシー

学生の学修成果の評価(アセスメント)について、その目的や達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針

アセスメント・ポリシーを外に示していかなければならない時代になってきている。今まで評価というと全て教員に任されていたものが、これからは基準を含めて洗いざらい議論し、共有できるところは共有する流れになっており、おそらく、これがこれからの大学における評価論のありようだと理解している。

冒頭で岡崎先生がおっしゃった中間テストについては、すぐにでも実行できることだと思っている。中間テストを実施して評価の基準を学生に一旦示してやると、その学生は、これから自分がすべきことを確認することができる。

ルーブリックを作るときに一番重要なのは、独自でルーブリックを作り、学生に見せるのではない。成功しているルーブリックは、学生と一緒に作っている。教員が設定した 2

という基準は、学生から見ると 1.5 かもしれないので、お互いの認識のズレを解消するためのコミュニケーションが必要である。

他者評価というのも、教育業界の中では常々言われていることである。ICT を使って、同じ科目を持っている他大学の学生とレポートをネット上で共有し、他大学の学生が例えば佛教大学の学生のレポートを評価し、逆に佛教大学の学生が他大学の学生のレポートを評価するというような相互評価をやっていくことも重要である。

# 平成 28 年度 第 1 回 教員研修会

**「今、大学に求められる成績評価とは」**

佛教大学教育推進機構



# 平成28年度 第1回教員研修会

## 「今、大学に求められる成績評価とは」

教育推進機構長

社会福祉学部社会福祉学科 岡崎 祐司

### なぜ、「成績評価」を議論するのか

○求められる学士課程教育の充実、学位の意義、  
教育の「質保証」

○入学者の学力格差、学力低下←基礎学力調査

○教育の成果をあげるために→シラバスの整備、  
授業方法の工夫…さらに重要なこと



各科目の「成績評価」、学修成果の評価

## なぜ、「成績評価」を議論するのか

○成績評価の厳格化、GPA導入

…「試験の評価を厳しくすればよい？」

○学生にとっては、

「単位がとれた！」 or 「落とされた！」

○われわれの教育の質とのかかわり…

今後、学習成果の評価方針（アセスメント・ポリシー）  
を作成するときの中心になる

科目レベルの「成績評価」、教育課程の「成績」分析

## なぜ、「成績評価」を議論するのか

急速な大学改革の潮流に押されながら、

次々に打ち出されてくる種々のシステム、スキームに

疑問を持ちながら（よく理解できないまま）、

受け身で対応を続ける（反応する）という姿勢でよいのか。

われわれ自身の教育をめぐる認識（成果、工夫、悩み…）

自身の教育へのとりくみ

学部学科の教育

多様性の統一あるいは統合としての大学教育

# わたし自身の成績評価をめぐる悩み

社会福祉原論 2H (学部基幹科目)

登録人数 106名 主に2回生

これまでの、社会福祉原論

○受講生の福祉観、社会福祉理解の基本になる内容。今後の専門科目、実習、演習の学修の基幹になる科目。しっかり、理解してほしい。

○しかし、期末試験（教室、論述問題）において到達目標に達しないものが年々多くなる。

○「論理的に記述する」ことができていない答案が多くなってきた。

4

## 授業風景



5

## なぜ、不合格なのかが、分からない

○不合格の学生、ぎりぎり合格の学生は、実は「この答案で十分」だと思っている。なぜ、この点数なのかが、理解できていない。

○不運、「ユーザーに落とされた」

「ユーザーは厳しい」

○教員の成績評価基準と学生の「通るだろう」、「なんで落ちたのか」という認識のズレ

## 成績評価基準の明示と中間試験の実施

○中間試験の実施

採点とルーブリック評価をつけて返却

希望する学生には、個別にコメント

○評価基準を実際に理解してもらう

○期末試験（教室試験）前の授業で

学習のポイント（振り返り）

成績評価基準の説明と注意事項

# 定期試験の評価基準の例

## 1. 日本語に関して

- ① 文法的に正しい日本語、表現として正しい日本語（記述用の言葉）を使用しているか。
- ② 話し言葉やSNSの言葉が混在していないか。
- ③ 字が正しく記述できているか。（漢字、ひらがなが正しく書けていない場合、減点の対象となる。）
- ④ 論理的な記述になっており、文章として展開しているか。（記述の量）

## 2. 内容

### (1) 生活のケアについて

- ① 生活や人の尊厳、個人の尊重とかがかわらせて、「生活のケア」をとらえているか。
- ② 三つの生活の層から「生活のケア」の役割をとらえているか。
- ③ 授業内容を踏まえてケアの本質を考えているか。
- ④ ケア・サービスの社会的性格、公共性をつかんでいるか。

### (2) 公共的な供給システムについて。

- ① 社会福祉サービスは公共性にもとづく提供システムによるべきだということをつかんでいるか。
- ② 普遍性、「必要充足原則」の確保の重要性を説明しているか。
- ③ 公共的な供給システムの構成と財政責任を説明しているか。
- ④ 委託方式を説明しているか。

## 課題

- シラバスの到達目標と成績評価基準のつながり
- ルーブリック評価の作成の難しさ
- はたして、学生の学修成果を確認する指標になるのか

# 免許必修科目：初等理科教育法 —中規模クラスの授業と評価—

教育学部：平田豊誠

## 概要

【毎回の授業内容】

回	内容
1	ガイダンス 小学校理科の現状
2	小学校理科の学習内容と目標
3	観察・実験での安全指導
4	小学校理科の指導法 エネルギー領域
5	小学校理科の指導法 粒子領域
6	小学校理科の指導法 生命領域
7	小学校理科の指導法 地球領域
8	理科学習の評価
9	理科学習論と授業づくり
10	学習指導案 書き方
11	学習指導案 作成
12	模擬授業1 指導技術
13	模擬授業2 授業展開内容
14	ICTの活用, 理科室経営
15	まとめ

理論編  
簡易観察・実験  
復習および振り返り課題

小レポート  
課題等が4回  
ほど出ます  
⑤⑥

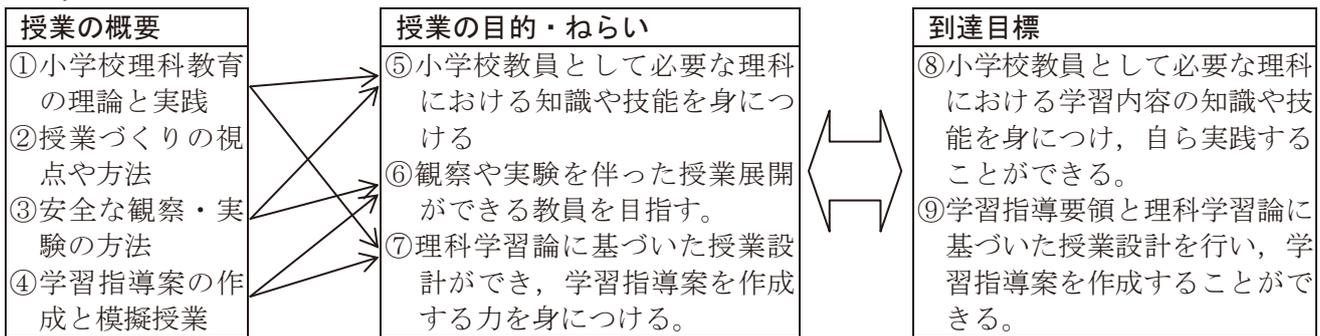
調査発表編  
課題調べ  
班別発表

グループでの課  
題等が出ます  
⑤⑥⑦

実践編  
模擬授業実践  
班毎討議

グループでの  
指導案作成と  
模擬授業・討論  
⑥⑦

## シラバス



- ⑤達成のため： 毎回の振り返り課題と授業開始時の前時の復習課題，各領域ごとの小レポート4回
- ⑥達成のため： 2～7回目にかけての簡易実験及び観察実技の実施
- ⑦達成のため： 班別課題としての授業論の調査・発表，指導案作成と模擬授業，班別討議

## 評価について

- [1] 定期試験（教室） 35%
- [2] 授業内発表 15% 模擬授業，学習論発表，班別協議
- [3] 授業内課題 50% 毎回の課題，レポート，学習指導案

【テスト問題】（アルファベットと下線は研修用に加筆）

- 現行の小学校学習指導要領，小学校学習指導要領解説理科編およびテキスト（理科教育法）をもとに，小学校理科の学習における，「見通しをもつ」こと，「問題解決の能力育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことについて a 整理し説明しなさい。さらに，b 授業で取り扱った授業例をもとに 具体的・簡潔に説明しなさい。
- 理科教育法の授業における，模擬授業や指導案作成において，c 自身の担当した授業時の①本時の目標を観点別学習状況の評価の観点に d 関連付けて説明するとともに，②本時の指導過程（指導展開）を簡潔に述べ（枠等は適宜自分で作成・設定して書くこと），e 授業づくりにおける大切にすべき点についても述べよ。その際には，f 自身の担当した授業法の説明内容の比較検討を入れ込むこと（素朴概念，言語活動においても同様とする）。
- 理科教育法の授業を通じた，自身の学びと課題について説明せよ。

⑧⑨に到達しているかを評価していくこととなる  
目安として，[2]は各5点を配当，[3]では毎回課題で20点，レポート4つで25点，指導案で5点を配当，模擬授業の授業者は加点テストでは，到達度を図ることのできる採点の要点を決めておく

評価において留意していること

- ・到達しているかどうかでみる
- ・チェックマンにならない
- ・時間をかけすぎない
- ・ちゃんとした成果を出している学生を裏切らない
- ・成績と評価とは自身では区別している

# 大人数講義における 授業評価の事例

現代社会学科 作田誠一郎

## 現在の大人数の担当講義と受講者数

- ・文化・国際特殊講義1H(現代青年論)  
コース(文化・国際)227名(2016年度)  
⇒他学部の学生も20名ほど履修
- ・逸脱行動論H  
コース(共生・臨床社会)127名(2016年度)
- ・学校病理と臨床A  
コース(共生・臨床社会)176名(2015年度)  
⇒他学部の学生も20名ほど履修

## 事例:「文化・国際特殊講義」

初回の授業において、シラバスに沿って授業の目標や方法(成績評価も含む)について説明を行う。

授業の テーマ	授業の 到達目標
授業の 概要と方法	全体の スケジュール

### 授業の到達目標

青少年に関わる基礎的な理論や社会関係を知り、その知見から今後の社会事象に対する多角的な考察が行えるようになることを到達目標とする。



- ・近代的な家族や労働環境における青少年の存在について客観的に理解する。
- ・青少年の生活に密着した文化を再考する。
- ・現代社会における青少年が直面する問題や今後の課題について理解し、検討する。

2

## 授業風景

3

# 課題

授業については、基本的に各コマごとにテーマを設定し、そのテーマに即した課題を授業の最後に示す。課題提出については、次回の授業終了時に集める(当日の提出を認めない)

分化的接触理論(分化的同一化理論)の立場から、あなたの知っている事件または出来事を例に挙げ、その原因と犯罪について述べてください。

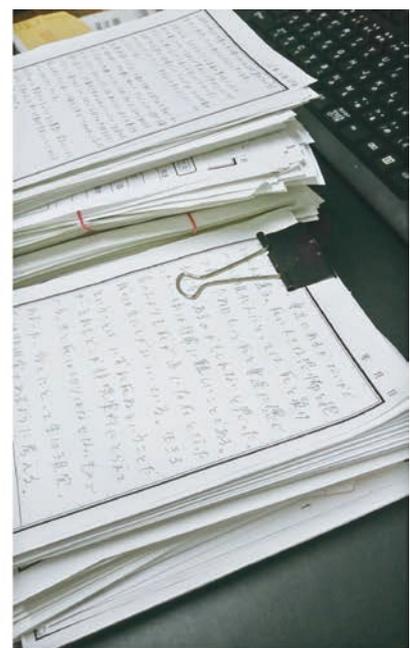
あなたが思いつく医療化現象を1つあげて、あなたの生活にどのような影響を与えているか述べてください。また今後、医療化の対象となりうる社会現象を1つあげてください。  
(例: 児童虐待など)

あなたは、犯罪者の素質を犯罪原因とする「素質説」(生来犯罪説、犯罪生物学など)と犯罪者を取りまく環境を犯罪原因とする重視する「環境説」(社会的・物理的な)のどちらの立場を支持し、その理由も含めて述べてください。

4

# 課題に対する評価

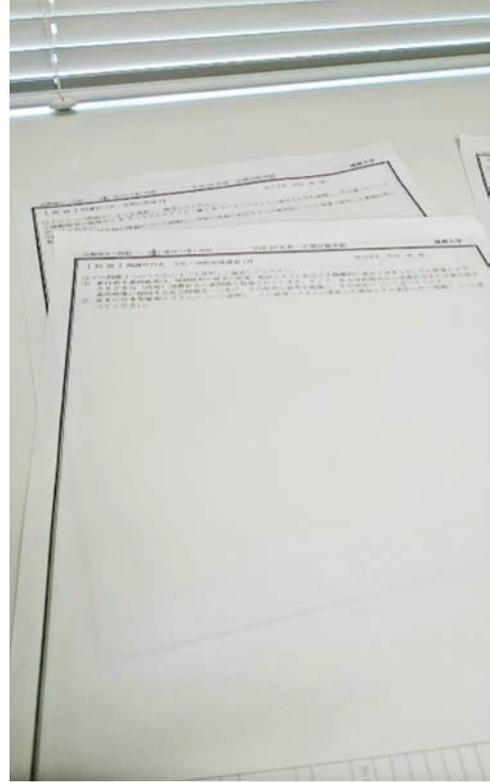
各課題に対しては、A+~C-までの9段階で評価している。



5

## 期末試験

学期末は60分の論述試験(2問出題し1問を選択)を行い、各課題を含めて総合的に評価する。



6

## 各テーマごとの課題および期末試験における成績評価の基準

- 課題に対する記述であるか。
- 授業内容を踏まえた記述になっているか。
- 客観的なデータ(授業で紹介した例も含む)をあげているか。
- 論理的に文章が記述されているか。
- 独創的(自己の体験談も含めて)な記述であるか。
- 授業の到達目標に対応しているか
- 誤字脱字がないか。

など

7

## 現状の成績評価の問題点

- ・論述の場合、成績評価が課題の内容によって相対的にならざるを得ない。

⇒課題内容のレベルをそろえる。課題の回数を増やすことで平均的な評価とする。

- ・成績評価に関わる学生への課題(理解度のチェック)は必要であるが、受講者数が多いため教員の負担は増加する。

⇒我慢する!?. 課題内容の検討。個別のフィードバック。学習の促進(学習内容の復習および自主学習など)。

- ・授業内容に対する知識の習得も重視するが、学生自身の発想も重要であるため評価が難しい。

⇒独創的な発想に対する得点をあらかじめ決めておき加点する?  
など

# 法然の生涯と思想の授業運営と 成績評価

仏教学部仏教学科 伊藤 真宏

1

## 法然の生涯と思想の概要

- 系列 全学共通科目
- 登録人数 151名（全て再履修）
- 曜日講時 月曜5限
- 授業の概要
  - 春学期に学んだ釈尊の教えをふまえ、大乘仏教、浄土教思想、日本仏教などを概説した上で、法然の思想を、その生涯とともに把握する。

2

# 到達目標および成績評価基準

- 到達目標

- 法然の生涯と教えを学ぶことにより，建学の精神を理解していただくことを到達目標としています。

- 成績評価の基準

- 定期試験（課題） 50%

- 授業内課題 50%

→ 授業風景を映像で少しご覧ください

3

## 授業風景



4

## 学生の特徴

- 学籍番号順の輪切りのため、選択の余地がない  
→ 教員との相性がしばしば問題 → 講義に出たくなる
- 一講目が苦手 → 欠席がち → 落とす
- 多人数で、基本真面目だがつつい陰に隠れて講義を聞かないという、学生個々の性格に起因する問題

5

## 講義の特徴

- 佛教大学の建学の理念に関わるため、必須だが、好むと好まざるに関わらず受講→好きでない講義
- 仏教に関わる内容のため、講義の話題が「死」とか「老」や、「煩惱」「愚」など、自分に向き合う面白くないことになりがち  
→ 面白くないという評価
- 10クラスの、難易度に差が出易い

6

# 方向性

- 出席は取る
- 寝てもいいがいびきをかくなと注意
- 試験に通れば合格
- 講義でテキストに書いてない、講義中に言ったことが試験に書いてあれば、点数は良い
- 質問はすぐに解決するよう促す
- 試験（レポート）は絶対放棄せず、できなくても受験せよと促す →未受験と0点の違い

7

# 評価について

- テスト（レポート）は、やろうと思えばできる問題  
「法然の思想や生涯で、心に留めておきたい点を指摘し、その理由を述べよ」 2000字程度
- 評価の基準  
60 = 設問には答え、記述内容が間違っていない。  
70 = 模範解答ではないが概ね正解。  
80 = 模範解答。  
90 = 模範解答 + a。完璧な解答。

そこから様々な要素を勘案して加点減点。

8

## 問題点

- 雑談
- ケータイ（講義中に鳴らす人は減ったが、音楽を聴いている。でも単純に排除できない。最近の学生は、タブレットはもちろん、卒論までケータイで書いてしまう。→ノートもケータイで写す）

悪貨が良貨を駆逐する

2016年9月15日（木） 16:30～18:00

平成28年度 第1回教員研修会  
今、大学に求められる成績評価とは  
**看護学科 老年看護学領域での取り組み**

看護学科 老年看護学  
松岡千代

## 発表のアウトライン

- 科目：老年看護方法論Ⅱ  
1単位 30時間（演習科目）  
※濱吉講師、後藤助教の共同担当
- 成績評価に関する以前の課題
- 改善点・工夫
- 実施してみて

## 老年看護方法論Ⅱの授業概要

回	内容	次回までの課題
1	老年症候群と看護ケア	
2	高齢者のエンドオブライフケア①	★エンドオブライフケア レポート課題提示 ・ナーシングスキル：褥瘡予防
3	演習① 褥創予防ケア（体位交換）	◆演習① 振り返りレポート ・ナーシングスキル：摂食嚥下ケア
4		
5	演習② 摂食嚥下機能の低下とケア	◆演習② 振り返りレポート ・ナーシングスキル：排泄機能障害
6		
7	演習③ 排泄機能障害へのケア	◆演習③ 振り返りレポート ・ナーシングスキル：関節可動域訓練
8	演習④ 介護予防ケア：関節可動域訓練等	◆演習④ 振り返りレポート
9		
10	高齢者と家族への看護	
11	高齢者のエンドオブライフケア②	課題① 事例提示 ⇒ 情報収集項目ピックアップ
12	看護過程展開1 情報の整理と全体像	課題② 全体像整理
13	看護過程展開2 分析と看護上の問題点抽出	課題③ 着眼点抽出と分析、看護上の問題点抽出
14	看護過程展開3 看護計画の立案	課題④ 看護計画立案
15	看護過程展開4 評価等の説明、まとめ	★最終看護過程レポートとして仕上げ提出 <span style="float: right;">2</span>

11	高齢者のエンドオブライフケア②	課題① 事例提示 ⇒ 情報収集項目ピックアップ
12	看護過程展開1 情報の整理と全体像	課題② 全体像整理
13	看護過程展開2 分析と看護上の問題点抽出	課題③ 着眼点抽出と分析、看護上の 問題点抽出
14	看護過程展開3 看護計画の立案	課題④ 看護計画立案
15	看護過程展開4 評価等の説明、まとめ	★最終看護過程レポートとして仕上げ提出（1w後）

## 老年看護方法論Ⅱの成績内訳

- 成績評価：授業内課題のみ（定期試験なし）
  - ① エンドオブライフケア 課題とレポート **20点**  
課題：事前指示書の記載と家族・友人との話し合い  
レポート：終末期医療・エンドオブライフケア・死についての考察
  - ② 看護技術演習  
振り返りレポート課題 各10点×4 = **40点**
  - ③ 看護過程演習課題 **40点**

4

## 以前の成績評価における課題と改善点・工夫点

- レポートや看護過程記録の評価
  - ・試験に比べて、主観的、曖昧になりがち
  - ・分担評価 → 評価の観点が異なる場合がある
    - ⇒ より客観的な評価指標が必要？
    - ⇒ 大学FDでの学び（シラバス・授業計画設計）
- 看護過程学習はグループ学習
  - ・各学生がどれくらいグループ学習に取り組んでいるかよくわからない
    - ⇒ 何らかの形で評価できる方法はないか？
    - ⇒ 評価の中に他己評価を導入（最高10点加点）

5

## 看護過程演習課題の評価観点

	優れている	標準的	不可
情報整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知りたい情報とその理由が具体的に記載されている</li> <li>・10個以上挙げている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知りたい情報とその理由が記載されている</li> <li>・6個以上挙げている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知りたい情報のみ記載されている</li> <li>・5個以下</li> </ul>
全体像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報をカテゴリ分けして、見やすく箇条書きにて整理できている</li> <li>・情報間のつながりを示すことができている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報をカテゴリ分けして記載できている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を羅列しているのみ</li> </ul>
着眼点・分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着眼点、関連するS/Oデータ、分析、看護上の問題に至るまで漏れなく明確に記載されている</li> <li>・1個以上の着眼点に対する分析と看護上の問題点抽出ができている</li> <li>・得た情報やデータを科学的根拠に基づいて分析できている</li> <li>・導き出した看護上の問題点のネーミングが分かりやすい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着眼点、関連するS/Oデータ、分析、看護上の問題全てが記載されている</li> <li>・1個の着眼点に対する分析と看護上の問題点抽出ができている</li> <li>・主観的に分析している箇所が多く、科学的根拠に基づいた分析が少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連するS/Oデータの整理ができていない</li> <li>・分析が主観的な内容のみに終始している</li> <li>・看護上の問題点が導きだされていない</li> <li>・導き出した問題点の意味が分からない</li> </ul>
看護計画立案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価しやすく具体的な長期・短期目標が挙げられている</li> <li>・具体的で個性のある看護計画が記載されている</li> <li>・誰でも計画を見れば実施できる内容が記載されている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な目標が挙げられている</li> <li>・長期目標と短期目標の違いが分かるように記載されている</li> <li>・具体的な看護計画が記載されている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期と短期目標が分けて設定されていない</li> <li>・評価できない内容の目標が示されている</li> <li>・看護計画に具体性がなく、一般的な内容のみが記載されている</li> </ul>

6

## 実施してみて

- 評価基準を初回授業で提示することで
  - ・学生・教員の両方が何を目指すかを共有できる
- 評価基準がクリアになったことで
  - ・評価点をつけやすい
  - ・学生への説明の根拠が提示できる
- グループ学習の他己評価を導入したことで
  - ・主体的に取り組む姿勢が認められる
  - ・学生の不公平感が払拭

7

# MEMO



# FD 研究会

## 「TA 活用事例報告会」

開催日：2016年12月21日（水）16：30～

会場：1-309 教室（1号館3階）

司会：岡崎 祐司（教育推進機構長・社会福祉学部 教授）

発表者：村瀬 敬子（社会学部 准教授）

山本 奈生（社会学部 講師）

参加者数：13名



# TA活用事例報告会

わが国のTA制度は、平成23年の中央教育審議会における答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」のとおり、**TAの組織的な活用と大学教員の養成としてのTA制度の運用**が期待されています。

教育推進機構では、昨年度より本学のTA制度を再検討してまいりました。今回の研修では、実際にTAを任用されている科目担当者よりTAの活用事例を報告いただき、その教育効果や課題等について議論します。

TAによる授業運営の補助や受講生へのフォロー等を検討されている方は是非ご参加ください。

## ■開催概要

- 日時：平成28年12月21日(水) 16:30～18:00
- 会場：1号館3階 1-309教室 16:00より受付開始

## ■プログラム詳細

- 本学におけるTA制度とその現状
- TAを活用した授業の実践事例報告

報告者：村瀬敬子先生 <社会学部 准教授>  
山本奈生先生 <社会学部 講師>

- まとめ：本学のTA制度のあり方

※次年度TA任用申請をされた方は  
必ず受講してください

## ■対象

- 専任教員
- TA

## ■申込

- 12月20日(火)までに教育推進課までご連絡ください(内線:2331～2333  
mail:fdoffice@bukkyo-u.ac.jp)



# 平成 28 年度 第 1 回佛教大学 FD 研究会

## 1. 開催概要

開催日：平成 28 年 12 月 21 日（水） 16：30～17：40

テーマ：「TA 活用事例報告会」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1 号館 3 階 1-309 教室

コーディネーター：岡崎 祐司（教育推進機構長・社会福祉学部 教授）

発表者：村瀬 敬子（社会学部 准教授）

山本 奈生（社会学部 講師）

参加者数：13 名

## 2. 要旨

わが国におけるティーチングアシスタント（以下 TA）制度は、1991 年に大学審議会による「平成 5 年度以降の高等教育の計画的整備について（答申）」をうけて、その翌年、大学院生における修学支援策として導入が進められた。また、本学でも導入から 10 年以上の歴史があり、一定の実績を積んできた。

近年の TA 制度は、修学支援策としてではなく、大学の学部教育を充実させるための手段や TA 自身の教育者・研究者としての資質を高めるための手段としても位置付けられるようになってきている。

本学の TA 制度についても、その意義を再確認し、活用方法を模索する段階にあるため、昨年より TA 研修および TA 説明会の実施、TA からの報告書の提出といった試みを展開してきた。

今年度の TA 研修では、TA 任用科目の担当教員による TA 活用事例を報告いただくとともに、実際に TA として授業補助を行なっている学生にも参加いただき、教育効果の向上あるいは研究者・教育者としての資質の向上といった成果について確認した。

## 平成 28 年度第 1 回 FD 研究会「TA 活用事例報告会」資料

### 本学の TA 制度の概要

#### (目的)

第 2 条 TA 制度は、本学大学院学生に教育指導に関する実務の機会を与え、これに給与を支給することにより、大学院学生の処遇の改善に資すると共に、学部学生に対する教育内容の充実向上を図ることを目的とする。

#### (資格)

第 3 条 TA は、本学大学院の博士後期課程または修士課程に在学する学生で、学部等の授業科目の補助をすることが適当であると認められた者とする。

#### (職務内容)

第 4 条 TA は、授業担当教員の指導のもと、その補助者として主に学部の実験・実技・実習・演習等の授業に関する教育補助業務を行なう。

※ティーチング・アシスタント規程より抜粋

### TA 任用科目一覧（平成 28 年度）

学部	開講科目	申請者	期別	配置人数
仏教学部	法務基礎 S（日常勤行）	法澤 賢祐	集中	4
	法務実習 3 A/4 A	法澤 賢祐	秋	3
文学部	中国語コミュニケーション応用演習 1 H	楊 韜	春	1
	中国語コミュニケーション応用演習 2 A	楊 韜	秋	1
	Advanced English (TOEFL) 1 H/3 H/5 H	田中 和也	春	1
	Advanced English (TOEFL) 2 A/4 A/6 A	田中 和也	秋	1
教育学部	投影法実習 H	石原 宏	春	1
	心理学初級実習 A	石原 宏	秋	1
	心理学中級統計法 1 A	石原 宏	秋	1
	心理学中級統計法 2 A	石原 宏	秋	1
社会学部	情報・メディア演習 1 Ha	村瀬 敬子	春	1
	情報・メディア演習 1 Hb	湯川 宗紀	春	1
	情報・メディア演習 1 Hc	長光 太志	春	1
	情報・メディア演習 2 Aa	村瀬 敬子	秋	1
	情報・メディア演習 2 Ab	湯川 宗紀	秋	1
	情報・メディア演習 2 Ac	長光 太志	秋	1

	調査研究演習 1 Ha	瀧本 佳史	春	2
	調査研究演習 1 Hb	山本 奈生	春	1
	調査研究演習 1 Hc	長光 太志	春	2
	調査研究演習 2 Aa	瀧本 佳史	秋	2
	調査研究演習 2 Ab	山本 奈生	秋	1
	調査研究演習 2 Ac	長光 太志	秋	2
	調査研究演習 3 Sa	瀧本 佳史	集中	2
	調査研究演習 3 Sb	山本 奈生	集中	1
	調査研究演習 3 Sc	長光 太志	集中	2
	プロジェクト演習 Sd	的場 信樹	集中	1
	プロジェクト演習 Sf	大東 貢生	集中	0
	プロジェクト演習 Sh	大東 貢生	集中	1

TA 所属一覧 (平成 28 年度)

研究科	専攻	所属人数
文学研究科	仏教学専攻	4
	文学専攻	2
教育学研究科	臨床心理学専攻	3
社会学研究科	社会学専攻	4
社会福祉学研究科	社会福祉学専攻	1
合計		14

## 昨年度からの運用変更点

### 1. TA 報告書を TA 毎から科目毎に変更

今までは科目担当者が TA 毎に報告書を作成し、提出していたが、TA の人数分報告書を作成しないといけなことから科目担当者の負担も大きく、また内容が似通っているものも散見されたため、報告書は科目毎の作成とした。これにより、教員目線あるいは授業目線で TA 活用の成果を確認することが可能となった。

### 2. TA 本人からも報告書の提出をさせる

一方で、TA 本人の教育者又は研究者としての資質における成果の確認も必要であるため、TA にも報告書を作成・提出させることとした。

### 3. TA 研修の開催

まだ TA 制度の運用が一部の学部に残っていることから、学内に本制度を広く周知させる必要がある。その啓蒙活動の一環として、平成 27 年度から専任教員を対象に（TA 任用科目申請者は必須として）研修会を開催している。

### 4. TA 説明会の開催（ハンドブックの作成）

教員向けの TA 研修のほかに、TA 本人にも TA 制度の意義・目的等を伝えるとともに TA 業務に従事するにあたっての心得等を確認させる必要があるため、事務的な説明会を今年度から開催している。

## 今後の課題

昨年度の TA 研修で挙げた課題点は以下のとおり。

### 1. TA の確保

- 語学系 TA の確保が難しい。語学力に加え、教育力や専門性の高さが求められる。
- 院生の時間割と TA 科目の授業の時間割がバッティングしてしまうと更に確保が難しい。
- 語学系に限らず、大学院生自体が少ないため TA の確保は困難。
- 講義科目の任用ができない。

### 2. TA の手当

- 手当は 1 コマあたり一律 2,000 円となっており、これに授業外での業務が含まれているため、TA に授業前後の補助業務を依頼しにくい。
- 交通費の支給がない。

平成28年度第1回FD研究会  
TA活用事例報告会

「情報メディア演習1.2」を事例から

村瀬敬子(社会学部現代社会学科)

## 情報メディア演習1.2の概要

- 社会学部現代社会学科の専門科目、教職科目(教科「情報」)。
- 動画作品を制作(主に1では30秒のCM、2では3分～5分程度のドキュメンタリー作品)
- 1人～3人で1作品を制作
- PC操作(技術)習得よりも、企画・制作過程・作品表現において、作品の“社会的な意味”を考察していくことを重視

## 情報メディア演習におけるTAの仕事

- ①機材の借りだしと返却
- ②PC等の機器の不具合時の対応
- ③学生の議論、発表、制作時のアドバイス

### ①機材の借りだしと返却

- 毎回、情報システム課や講師控え室から機材(ビデオカメラ、三脚、ヘッドセット等)を借りだして、授業の終了後に返却。

### ②PC等の機器の不具合時の対応

- 画面のフリーズ、ソフト(Video Pad等)の不具合、データ等素材関連の問題



### ③学生の議論、発表、制作時のアドバイス

- 個別(作品別)にアドバイスを行う  
企画書→絵コンテ、シナリオ→撮影、編集
- 作品のテーマと展開について
- グループごとの議論の整理
- グループ発表でのコメント
- 撮影場所、マナーや手続き
- 映像表現の社会的な意味について  
(作品例) [セクハラ](#)、[本当の友達](#)



## TA活用の教育効果と今後の課題

- PCトラブル等、同時多発的に起きるトラブルに速やかに対応できる。
- 先輩の目線からのアドバイス⇒教育効果↑
- 大学院生が少ない
- TAに対する大学全体の理解を深めること

## 調査研究演習における TA 活用事例

山本奈生（現代社会学科、専門社会調査士）

### 1. 調査研究演習の概要

**調査研究演習：** 3 クラスがあり、その内 2 クラスが社会統計学による「アンケート・クラス」、1 クラスが質的調査法による「インタビュー・クラス」。講義は通年であり、春学期、集中、秋学期に至る。

受講者は 3 年次生であり、1 クラスあたり 10 名～15 名程度となる場合が多い。秋学期末（2 月中旬まで）に、「社会調査協会」に対して各クラスが「調査報告書」を作成し「社会調査士」の資格を得ることが演習の目的である。

#### 春学期シラバス

- 第 1 回 スケジュール確認, 調査テーマの原案紹介
- 第 2 回 調査日誌の作成開始, 倫理的問題とラポールの検討
- 第 3 回 インタビュー調査の考え方および技法
- 第 4 回 参与観察の考え方および技法
- 第 5 回 コンピュータを利用したスクリプト作成とデータベース化
- 第 6 回 模擬調査のテーマ設定
- 第 7 回 模擬調査の実施: 受講生同士でボイスレコーダでインタビューの模擬調査実施
- 第 8 回 模擬調査のデータベース化: インタビュー録音をトランスクリプト化
- 第 9 回 模擬調査のデータベース化: データの分類・整理
- 第 10 回 データベースのコード付け
- 第 11 回 データベースの分析・解釈(1)
- 第 12 回 データベースの分析・解釈(2)
- 第 13 回 調査結果の発表および討論(1)
- 第 14 回 調査結果の発表および討論(2)
- 第 15 回 本調査のスケジュール作成

このように、「インタビュークラス」では、質的調査法のグラウンデッド・セオリーを用いて分析を進める。量的調査のクラスでは、統計ソフト SPSS を用いた単純相関分析、重回帰分析（可能であれば）を行う。

## 2. 演習における1年間の流れ（インタビュー・クラスの場合）

### 春学期

前半期： 自己紹介、学級マネジメント、方法論概説、テーマ設定

後半期： 先行研究の検討、半構造化面接における質問項目の作成

練習インタビュー（受講生相互のインタビュー）、初期コーディング

**集中講義：** インタビュー調査の実施（対象者数名、各 60 分程度）

調査結果の概要報告会

### 秋学期

前半期： テープ起こし、対象者間の比較、コーディング作業の実施

後半期： 調査報告書の執筆（各人が A4 原稿にて 20 枚～数十枚）。

\* 調査報告書は論文（卒業レポート／卒論）ではないため、あくまでも「調査者の問題関心、先行研究」から得られた各テーマにおける、調査結果の概要整理が目的である。

\* 調査テーマは各受講生一人ずつ異なっており、共通テーマとして「現代日本における若者」を設定している。このため、「若者文化論」「若者の人間関係」「学生と就職、労働」「ボランティアやサークル活動」「若者とジェンダー」など多方面の社会学分野が選ばれている。

## 3. TA をめぐる先行研究

2000 年代の前期～中期においては、大学における制度上の問題として TA 制度をどのように位置づけるのかといった議論が主流であったが、過去 10 年間においては、議論はその運用方法や教育学的な方向へとシフトしつつある。

例えば、吉良直による北米地域での TA 制度の概観においては、大学におけるしっかりとした TA の地位を前提とした北米圏の大学における「新任 TA への教育制度」について考察されている（吉良 2008）。

ここでは、特に修士課程に入ったばかりの新任 TA などに対する、大学全体として位置づけられた教育プログラムについて検討されており、担当専任教員における養成だけではなく、博士課程在籍者や助教など、かつて、あるいは今現在においても TA を行っているベテランからの個別指導による業務・指導法の引き継ぎが行われていることが示されている。

また昨年度創立された広島大学「学習システム支援センター」に掲出されている渡邊・大坂・草原の論文では、現場実践における TA の課題が以下のようにまとめられている（渡邊・大坂・草原、2015）。

上述論文が示した新任 TA にとって課題となりがちな諸点

- (1) 他者との関係構築 (教員-TA および TA-受講生)
- (2) 研究/学習との時間配分
- (3) 特定の専門分野における知識/講義経験の不足

当該論文は、主として北米地域における先行研究に基づいて議論が展開されているため、日本の大学に比べて多くの業務量(大講義補助を含み、通年で 7500 ドル~2 万ドルの給与が得られる)をこなす TA を想定しているため、(2)(3)に関しては、本学の事例にはそのまま当てはまらないかもしれない。

#### 4. 調査研究演習での TA 業務

業務内容	具体的業務	業務の性質
授業準備補助	プリントの印刷や配布 事前打ち合わせ	事務的
演習運営補助	受講生の進捗把握 個別質問への回答	教育職員の
報告書作成補助	基礎的作文の指導 個別質問への回答	教育職員の

・ 演習において取り組む個別テーマは受講生各人によって異なっており、その進捗もまちまちであるため、進捗把握と段階に応じたアドバイスが必須である。

・ 演習初期の段階において、「クラスとしての共同体性」を緩やかに設定し、これにより受講生相互/教員・TA・受講生相互の質疑を行いやすくするための時間を設けている。

⇒ 堅い講義テーマに限定しない、緩やかな座談会。学内喫茶の教育的利用など。

#### ◎ 課題

・ 理念的な「そもそも論」で言えば、時給 1000 円換算はもっとも低い水準であり(他大学の場合、学部生 1500 円、院生 2500 円/時給の事例もあり)、地方国立大の時給 1200 円の事例においても「給与が低く抑えられている」ことが問題視されている。

・ 新任引き継ぎの場合の、事前教育プログラムが必要ではないか。

文献

吉良直、2008、「アメリカの大学における TA 養成制度と大学教員準備プログラムの現状と課題」『名古屋高等教育研究』第 8 号, pp193-215.

渡邊巧・大坂遊・草原和博、2015、「大学院生の学習システムとしての GTA の体系とその意義」『学習システム研究』Vol.1, pp16-29.



2016 年度 FD 関連研究会  
参加支援報告



平成28年度学外FD関連研修会参加支援一覧

開催日時	企画名称	テーマ	主催	参加者所属
2016年5月28日	初年時教育学会実践交流会関東地区	初年時教育でどのように学生のモチベーションを維持するか	初年時教育学会地域活動活性化委員会	現代社会学科
2016年6月17日	NewEducationExpo2016	新しい時代と社会に開かれた教育課程 ～学習指導要領の改訂にあたり～	NewEducationExpo実行委員会事務局	歴史学科
2016年7月1日	大阪府立大FDワークショップ	学生の自己学習を促す「教材開発アプリ」の活用	大阪府立大学高等教育開発センター	教育学科
2016年11月2日	能動的学習を促進する授業デザイン ～能動的学習の評価を考える～	能動的学習を促進する授業デザイン ～能動的学習の評価を考える～	首都大学東京FD委員会	看護学科(2名)
2016年11月4日	FDセミナー	グループワークを豊かな学習活動とするために ～ジグソー法の理論・実践とその活用～	大阪府立大学	教職支援センター
2016年11月11日	FD講演会	デジタルネイティブ世代への教育方法 ～様々なツールを活用したアクティブラーニング～	関西学院大学教務機構 高度教育推進センター	教職支援センター
2016年12月2日	「障害者高等教育拠点」FD/SD研修会	大学等における障害学生のキャリア発達支援	障害者高等教育研究支援センター	教育学科
2016年12月3日	大学教育学会2016年度課題研究集会	学生はいかに学んでいるのか	大学教育学会	歴史学科
2017年1月28日	学校法人芝学園公開シンポジウム	「いのち」について考える	学校法人 芝学園	歴史学科
2017年3月19日～20日	第23回大学教育研究フォーラム	アセスメント・イン・アクションー評価の新しい形ー	京都大学高等教育研究開発推進センター	現代社会学科

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	初年次教育学会地域活動活性化委員会
企画名称・テーマ	初年次教育学会実践交流会
開催日＜会場＞	初年次教育でどのような学生モチベーションを維持するか 平成 28 年 5 月 28 日（土）＜東京学院大本郷キャンパス＞
参加者 所属	社会学部 現代社会学科

参加報告

【研修会の趣旨】

初年次教育学会は平成十九年に設立された初年次教育の理論・実践に関連した幅広いテーマを扱う学会であり、本研修会は 2016 年度から始まった「実践交流会」の第 2 回目である。「実践交流会」では各大学の初年次教育担当者が成功・失敗事例を報告し、参加者と意見交換することで初年次教育の更なる発展に寄与することが目的とされている。

【研修会の概要】

「実践交流会」では 4 つの実践報告とパネルディスカッションおよびフロアとの意見交換が実施された。特に興味深かったのは崇城大学藤本先生による「初年次教育におけるポートフォリオの活用と課題」というテーマの報告であり、前職の金沢工業大学時代の学習支援システムを用いたポートフォリオの活用事例が紹介された。その中でも先輩のポートフォリオを後輩に公開することで学習のモチベーションにつなげるといったアイデアは秀逸なものであり、実際に学生の学習に対する姿勢に変化が生じたとのことであった。また、そうした変化がエビデンスを用いて証明されていた点についても大変参考になるものであった。方で、成果を得るまでには十年近くの試行錯誤が繰り返されており、同様の手法を単純に模倣するだけではうまくいかないであろうということも同時に示唆されていた。

他にも、書籍の紹介を競争形式で行う「ビブリオバトル」の事例などは本学の入門ゼミにも応用可能なものであり、新しいアイデアとして参考になるものであった。加えて、実践報告の多くやパネルディスカッションにおいて初年次教育における教職協働の重要性が指摘されていたことも印象的であった。

【本学の FD 活動における検討課題】

本学でも現在新学習支援システムが準備されているところであるが、システムの開発だけでなくその活用についても検討すべき点が多いように考えられる。例えば、ポートフォリオの活用は単一の講義だけでは達成できないものであるため、全学的な取り組みが不可欠である。こうした活用のための前提条件の一つ一つ取り組んでいくことが重要である。また、教職協働については特に職員への負担が大きいが指摘されており、徒に業務を増やすのではなく、学習の質向上に寄与する取り組みがいかに集中できるようにするかといった環境面での整備も今後の検討課題として捉える必要があるだろう。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	株式会社 内田洋行 教育総合研究所
企画名称・テーマ	NEW EDUCATION Expo 2016 大阪
開催日＜会場＞	新しい時代と社会に開かれた教育課程 一学習指導要領の改訂にあたりー 平成 28 年 6 月 17 日（金）＜大阪 OMM ビル＞
参加者 所属	歴史学部 歴史学科

参加報告

文部科学省大臣官房教育改革調整官、平野誠氏の「新しい時代と社会に開かれた教育課程～学習指導要領の改訂にあたり～」文部科学省初等中等教育局高校教育改革プロジェクトリーダー、今井裕一氏、独立行政法人大学入試センター試験評価解析研究部門、助教大久保智哉氏の「高大接続システム改革～高校改革の観点から～」の 3 本の講演を拝聴した。現在、文部科学省において進められている学習指導要領の改訂、高大接続システムの改革にかかわる語で、今後のカリキュラムの改訂、入試改革などに資する内容であった

はじめに、2016 年 6 月 17 日（金）に、大阪 OMM ビルにて開催された NEW EDUCATION Expo 2016」に参加し、以下の 2 講演（ただし 1 講演について追加講演あり）を拝聴したので、その概要についてまとめる。ただし概要に関しては一部感想を含む。

◆第一講演「新しい時代と社会に開かれた教育課程～学習指導要領の改訂にあたり～」

文部科学省大臣官房教育改革調整官 平野誠

平成 32 年の小学校を皮切りに、順次改訂される学習指導要領について、改訂の背景と基本的な考え方（理念と方針）、改訂作業の進捗状況と今後のスケジュールについて説明がなされた。

まず最初に、改訂の背景についての説明がなされた。人口、将来人口、生産年齢人口の推移などから、約 50 年後の日本では、総人口の 3 割、生産年齢人口の半分が減少し、それに伴い日本の国際競争力の低下が懸念される。また近年の調査により、OECD 加盟国生徒の学習到達度の調査結果や全国学力、学習状況調査の結果については好転、改善している一方で、学習に対する生徒の意識や自己肯定感、社会参画に関する意識が著しく低いことから、初等中等教育のあり方を再考する必要がある。こうした状況は、文部科学省にとって次世代を担う生徒に対する教育への危機感と捉えられ、これが今回の学習指導要領改訂の背景としてあげられる。

今改訂においては、上記の認識に基づき、「生きる力」の育成に力点を置き、実際には確かな学力、豊かな心、健やかな体という「学力の三要素」をバランス良く確実に育成することをねらいとした学校教育の実現を目指すことを理念とする。さらに高校教育について、これまでの知識詰め込み型の教育から脱し、重要用語の整理などを含めた高大接続改革の実現を目指すとし、大学入試選抜において事後的知識の暗記のみを問うことを問題視しており、今改革によってその克服を目指すとの指摘もあつたが、これもまた上述したような初等中等教育に対する危機感の延長線上で理解すべきであろう。

次に、学習指導要領の改訂にむけた検討とその体制について述べられた。改訂の検討作業は、中

央教育審議会教育部会のもとに設置された各教科ごとのワーキンググループを中心に検討が進められているが、とりわけ言語能力の向上、高等学校の地歴公民科科目のあり方、数学理科にわたる探求科目のあり方については、別途特別チームが編成され、集中的な検討が行われている。

改訂の検討体制についての説明に続いて、数学・国語・英語の各教科の検討作業の様子が述べられたが、最大の関心事である社会科科目についての言及はなかったためひとまず割愛する。

最後に、今後のスケジュールについて解説された。現在検討中の新たな学習指導要領については、今年度中には中教審答申として取りまとめられ、来年度以降はその実施に向けた準備が開始される予定であるが、本学との関連でいえば、高校教育に関する変更を中心に引き続き留意が必要である。

#### ◆第二講演「高大接続システム改革について～高校改革の観点から～」 文部科学省初等中等教育局高校教育改革プロジェクトリーダー 今井裕一

今回の報告では、1. 「高大接続改革」とは何なのか。2. 高校生の現状。3. 高大接続システム改革会議「最終報告」について。4. 高大接続改革に関する平成28年度予算の4項目について述べられたが、説明の大半は3. 高大接続システム会議「最終報告」をもとにした説明であった。

最初に、高大接続改革とは、高校教育、大学教育、両者を接続する「大学入学者選抜」の3つの改革を連続したものととして一体的に改革しようとするものであること、その背景には、少子化、国際競争の激化の中で「大学教育の質的転換（しっかりと学ぶ大学教育）」が強く求められること、そのためには大学教育に接続する高校教育のあり方についても改革する必要があることが述べられた。

次いで、高校生の現状について、平均学習時間については中上位層には改善傾向が見られるものの、下位層は低い水準で推移していること。OECD生徒の学習到達度調査などにおいて、スコア自体はOECD諸国中でも上位に位置するものの、学習の内容に対する興味・関心の低さが目立つ（平均53%、日本38%）とし、大幅な改善が必要との認識（新成長戦略）として閣議決定）を有していること。不読者が半数にも及ぶ高校生の読書量、自己肯定意識、社会参画意識の低さ、1日あたりのスマートフォンの使用時間の多さなどの高校生を取りまく状況が説明された。

こうした状況をふまえ、高大接続システム改革会議最終報告をもとに、高等学校教育改革、大学入学者選抜改革、大学教育改革の3つの改革について、それぞれの改革の具体的な内容について述べるとともに、3者を関連させた改革全体のイメージについて述べられた。その内容は多岐に及ぶが、本学との関係でいえば、高校教育改革における教員の養成・採用・研修の見直し、大学入学者選抜改革における平成32年度より実施予定の「大学入学者学力評価テスト（仮称）」のありよう、大学教育改革における三つの方針（APのPIQP）に基づいた大学教育の質的転換、および認証評価制度の改善については、今後最終報告が実施される過程で、それらの諸点がいかなる形で実現を要求されるかという点を中心に、引き続き注視が必要である。

最後に、今回の高大接続改革に関する予算措置について述べられたが、大学教育改革に15億円、大学入学者選抜改革に4.4億円、高等学校教育改革に1.1億円（拡充）という数字だけを見れば、改革実施が大学教育改革にウェイトを置いたものであることが理解される。また、大学教育改革に位置付けられている、大学教育再生加速プログラム「高大接続改革推進事業」の推進に関して、効果的な手法の開発、先進的なモデルとなる取り組みについては文部科学省がバックアップをしていきたい旨の発言もあった。

#### ◆追加講演「高大接続システム改革～高校改革の観点から～ CBTとIRTの活用と試験運用技術のこ れからの展開」

大学入試センター 研究開発部試験評価解説研究部門 助教 大久保智也

平成32年より試験実施がなされる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」（新学習指導要領に基づく完全実施は平成36年から）において、テストの具体的なあり方の方の試みとして導入が検討されているCBT、IRTなどの新たなテストの方法について説明がなされた。

上記のテストは、現行の大学センター試験に変わる新たな統一テストであるが、文部科学省の実施方針が、学力の3要素の確実な定着、その度合いを測るテストとすることから、現行のマークシート方式に代わる（併用？）新たな試験方法として、二つの方法が紹介された。

一つは、CBT（Computer Based Testing）であり、もう一つは項目応答理論または項目反応理論と呼ばれるテスト（IRT：Item Response Theory；Item Latent Theory）である。両者の具体的な内容については、試験段階であることもふまえ割愛するが、導入の意図は、センター試験の受験人口に対して、知識偏重型でない試験を実施する必、要があることから、コンピュータを用い、一斉に実施する必要がなく、複数回の受験機会を確保するなどの諸条件を併存させることに重きが置かれた内容である。

特に注目される点は、IRTの導入が検討されている点であり、これはこれまで何問正解できたかが評価の基礎にあったのに対し、個々の項目（試験問題）に難易度などの指標を与え、何問正解できたかではなく、どの難易度に安定的に正答することができるかを測る方法であることである。これは、改訂作業が進む学習指導要領において「学習の3要素の確実な定着」などと大いに関連する点でもあり、注目に値する。また講演者からは、複数回の受験機会を保障することが計画されている点など、今後の動向に注目すべき内容も述べられた。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大阪府立大学高等教育開発センター
企画名称・テーマ	平成 26 年度文部科学省教育再生加速プログラム事業 学生の自己学習を促す「教材開発アプリ」の活用術
開催日＜会場＞	平成 28 年 7 月 1 日（金）＜大阪府立大学＞
参加者 所属	教育学部

参加報告

【研修会の趣旨】

iPad アプリを使い、知識を教授して授業時にディスカッション等で活用してインタラクティブな活動を増やせるような、活用術を伝授する。

【研修会の概要】

- (1) Show Me のワークショップ
  - ① 板書動画を作成して発表する IPAD に板書しながら講義する動画を収録するアップロードする場所も提供してくれる
  - \* インターネットでは公開する場合はアカウントが必要（有料で年間 6000 円）
  - ② 授業活用の仕方を考える動画の URL 学生に知らせる。URL を QR コードにしてスマートフォンで読み取る方法もある。動画をもとに授業内活動を組み立てる方法が考えられる
- (2) ポストイットデジタルツール
  - ① KJ 法やグループワークの話し合いで出されたアイデアを正方形のポストイットに書き込み、Post-itPlus アプリで撮影する。
  - ② 撮影したポストイットをグループ分けして、Excel ファイルや PowerPoint ファイルに書き出す。

【本学の FD 活動における検討課題】

1. Show Me アプリを活用すると、通常の授業では同じことを繰り返すこともあるが、板書動画では学生が自由に再生できるのでその必要がない
2. 無料アカウントでは動画を Show Me サイトで公開しなければならぬ
3. Show Me 1.1 には QR コード W 生成機能がないので、他のサービスを利用する必要がある
4. Show Me では音声の録音がやや安定しない
5. ポストイットデジタルツールは簡便でグループワークでの活用ができる
6. 学生に教材を作成させたり、模擬授業で活用できると考える

補足

- 本時の概要の URL : <http://goo.gl/Lr2741>
- Show Me Interactive Whiteboard（無料、アプリ内課金あり）
- Post-it Plus（無料、アプリ内課金あり）
- QR 読み取りアプリ : お父さん QR（無料、広告表示あり）

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	首都大学東京 FD 委員会
企画名称・テーマ	平成 28 年度首都大学東京印セミナー 能動的学習を促進する授業デザインー能動的学習の評価を考えるー
開催日＜会場＞	平成 28 年 11 月 2 日（水） ＜首都大学東京南大沢キャンパス本館棟 1 階大会議室＞
参加者 所属	保健医療技術学部 看護学科

参加報告

【研修会の趣旨】

近年の大学生の学びと成長の傾向を踏まえ、大学教育における学生の能動的学習を評価するための視点について議論すること。

【研修会の概要】

- ① 基調講演  
「アクティブラーニングの評価方法を考える」  
講師 岩崎千晶氏（関西大学教育推進部教育開発支援センター准教授）
  - ② 調査報告  
1 「授業外学習時間が多いのは、どのような学生か」  
講師 岡田佐織氏（ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室研究員）  
2 「授業アンケート結果から探る授業外学習時間」  
報告者 松田岳士（大学教育センター教授・FD 委員会委員）
  - ③ 学内事例発表＜ループリックを用いた学習成果の評価に関する学内の取組事例＞  
「経営学系における教育改革推進事業ー中間報告ー」  
報告者 野口昌良（都市教養学部経営学系教授）  
「ループリックを用いた学習評価は学生の主体的学習に役立つか？」  
報告者 鈴木準一郎（都市教養学部理工学系生命科学コース准教授）
- 基調講演では関西大学の岩崎准教授より「アクティブラーニングの評価方法を考える」をテーマに育てたい学生像と学習目標を明確化することの重要性と、学習目標を反映する評価方法としてのループリックの活用例の紹介がなされた。
- 調査報告としてベネッセ教育総合研究所の岡田氏より「授業外学習時間が多いのは、どのような学生か」をテーマに全国の大学 2 年生 25477 名の学習実態調査と大学生基礎力調査の結果から授業外の能動的学習に関係する要因についての考察を述べられた。また、大学教育センターの松田教授より「授業アンケート結果から探る授業外学習時間をテーマに科目と授業外学習時間との関係性についての考察を述べられた。

ルーブリックを用いた学習成果の評価に関する学内の取組事例として、現在取り組まれていている事例の紹介がなされた。

**【本学のFD活動における検討課題】**

本研修会において学生の能動的学習を進めるうえでルーブリックを用いることは有効ではあることは示唆されたが、運用方法についてルーブリックの内容の妥当性を評価しながらよりよいものにしていくことが重要出ると指摘もされている。本学の看護学科の基礎看護学領域では2016年度より一部の科目でルーブリックを活用し始めたが、全科目の運用には至っていない。今後、ルーブリックの活用可能性も十分検討したうえで、学生の学習指針となり得るような評価方法を検討する必要があるのではないか

**FD 関連研修会 参加報告書**

主 催	首都大学東京 FD 委員会
企画名称・テーマ	平成 28 年度首都大学東京印セミナー 能動的学習を促進する授業デザインー能動的学習の評価を考えるー
開催日<会場>	平成 28 年 11 月 2 日 (水) < 首都大学東京南大沢キャンパス本館棟 1 階大会議室 >
参加者 所属	保健医療技術学部 看護学科

参加報告

**【研修会の趣旨】**

近年の大学生の学びと成長の傾向を踏まえ、大学教育における学生の能動的学習を評価するための視点について議論すること。

**【研修会の概要】**

① 基調講演

「アクティブラーニングの評価方法を考える」

講師 岩崎千晶氏 (関西大学教育推進部教育開発支援センター准教授)

② 調査報告

1 「授業外学習時間が多いのは、どのような学生か」

講師 岡田佐織氏 (ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室研究員)

2 「授業アンケート結果から探る授業外学習時間」

報告者 松田岳士 (大学教育センター教授・FD委員会委員)

③ 学内事例発表<ルーブリックを用いた学習成果の評価に関する学内の取組事例>

「経営学系における教育改革推進事業ー中間報告ー」

報告者 野口昌良 (都市教養学部経営学系教授)

「ルーブリックを用いた学習評価は学生の主体的学習に役立つか？」

報告者 鈴木準一郎 (都市教養学部理工学系生命科学コース准教授)

基調講演では関西大学の岩崎准教授より「アクティブラーニングの評価方法を考える」をテーマに育てたい学生像と学習目標を明確化することの重要性和、学習目標を反映する評価方法としてのルーブリックの活用例の紹介がなされた。

調査報告としてベネッセ教育総合研究所の岡田氏より「授業外学習時間が多いのは、どのような学生か」をテーマに全国の大学 2 年生 25477 名の学習実態調査と大学生基礎力調査の結果から授業外の能動的学習に関係する要因についての考察を述べられた。また、大学教育センターの松田教授より「授業アンケート結果から探る授業外学習時間をテーマに科目と授業外学習時間との関係性についての考察を述べられた。

ループリックを用いた学習成果の評価に関する学内の取組事例として、現在取り組みられている事例の紹介がなされた

**【本学のFD活動における検討課題】**

本研修会において学生の能動的学習を進めるうえでループリックを用いることは有効ではあることは示唆された。本学の母性看護方法論Ⅰ、Ⅱでは、能動的学習の一つである協同学習を取り入れ、さらにループリックも使用している。しかし、ループリックについて学生と共通認識を持っておらず、効果的な使用はされていない。さらに、能動的学習とループリックの関連についての検討もされていない。今後は、具体的な授業展開とループリックの相乗効果について明らかにしていくことが必要である。

**FD 関連研修会 参加報告書**

主催	大阪府立大学高等教育開発センター
企画名称・テーマ	グループワークを豊かな学習活動とするために —ジグソー法の理論的背景とその活用—
開催日＜会場＞	平成28年11月4日（金）＜大阪府立大学中百舌鳥キャンパス＞
参加者所属	教職支援センター

参加報告

**【研修会の趣旨】**

グループワークは、学生の知識を外化する上で重要な役割を果たしますが、ただ思っていることを話し合わせるだけでは、知識の深化につながらないかもしれない。本セミナーでは、グループワークを豊かな学習活動にする手法として“ジグソー法”の背景理論とその活用事例について研修を行い、学生により豊かな学びに繋げる。

**【研修会の概要】**

- ① 開会挨拶 15:00～15:05  
前川寛和（高等教育推進機構構長）本会は、大学教育再生プログラムの一環
- ② 講演「益川弘如」・グループワーク 15:05～16:45  
  - ・ 初等・中等教育における状況
  - ・ 2020年指導要領の実施…世界的な知識基盤社会からの変化への対応
  - ・ 学力とは「正確に覚えているか」から「新しい知識・価値・考えを創り出す」へ
  - ・ ジグソー法の理論的背景と活用方法

活用できる知識「できるようになる」とは、①学んだ場以外に持ち出せて（portable）②必要な時に使え（dependable）③作り変えつつ維持できる（sustainable）をめざして、人との関係における効果的な学習法を学ぶ。

グループで1つの課題の資料を分割して、グループ内で教え合いながら、課題を解決していく方法。

- ・ 高等学校の事例を用いたワークショップ（人文系 理工系）  
人文系…「城の立地を考える」 理工系…「デンブンの変化」
- ③ 質疑応答 16:45～16:55
- ④ 閉会挨拶 16:55～17:00 星野聡孝（高等教育開発センター長）

参加の感想：人材育成のための方向性と手立ての工夫が窺え、熱い思いが感じられた

**【本学のFD活動における検討課題】**

大変分りやすく、また、アクティブラーニングやグループ学習でのヒントとなるのであった。「学習科学」という視点からのお話等で、本学の印研修の検討を。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	関西学院大学教務機構高度教育推進センター FD講演会
企画名称・テーマ	デジタルネイティブ世代への教育方法 —様々なツールを活用したアクティブラーニング—
開催日<会場>	平成 28 年 11 月 11 日 (金) <関西学院大学上ヶ原キャンパス>
参加者 所属	教職支援センター

参加報告

【研修会の趣旨】

近年、日本では講義型の授業に加えアクティブラーニング型の授業を取り入れるなど教育方法の見直しが迫られています。こういった背景の中、私たち教職員はデジタルネイティブ世代をどのように指導していけばよいのでしょうか。

本講演会では、教育工学を専門とし、日々の授業において学習者の学びを深めるために様々なツールを活用している京都外国語大学の村上教授にお越しいただき、「デジタルネイティブ世代の特徴」「アクティブラーニング」「Twitter などの ICT を中心とした様々なツールの利用」について解説して頂きます。

【研修会の概要】

- ① 開会挨拶
- ② 講演「村上正行」京都外国語大学
  - ・ デジタルネイティブ世代の背景と現状
  - ・ いろいろなアクティブラーニングの紹介（東京大学の105分授業）
  - ・ アクティブラーニングの実践と困難点の交流
  - ・ 大学教育にツイッターを導入する意義
- ③ 質疑応答 16:45～16:55
- ④ 閉会挨拶 16:55～17:00

参加の感想：私自身がアナログに近く、ツイッター等の理解に乏しいのでイメージがしにくかった。また、講師の方が少し早口なので聞き取りにくかった。

【本学のFD活動における検討課題】

各大学が、LINE 等での炎上問題等に関するガイドライン等を出して指導しているが、本学でもそのような対応の必要があるのではないか（本学の現状を把握しないままですべて述べています）。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	障害者高等教育研究支援センター
企画名称・テーマ	「障害者高等教育拠点」FD/SD研修会 「大学等における障害学生のキャリア発達支援」
開催日<会場>	平成 28 年 12 月 2 日 (金) <上智大学四谷キャンパス>
参加者 所属	教育学部 教育学科

参加報告

【研修会の趣旨】

キャリア教育とは、「学生の卒業後を見据え、社会的・職業的自立に向けて必要なスキルや態度の習得を促す」ことである。大学等における障害学生のキャリア発達支援を考える。

【研修会の概要】

2.1 総論：障害学生のキャリア発達支援について 筑波技術大学 石原保志

- ①多様な場面の直接的体験・間接的体験→自ら考えようとする習慣
- ②目標設定 ③意思決定 ④成功体験、失敗体験、克服体験 ⑤体験をとおした自信から生じる自己肯定感 ⑦精神的自立→これらの心理的発達を、依存的心理状態からの脱却、自己の客観的認識（メタ認知）、社会的文脈の理解、セルフアポカジーといった学生の就労レディネスを培っていく。

2.2 パネルディスカッション

- ①筑波技術大学（天久保キャンパス）での障害理解の促進、社会体験増加の取組み（筑波技術大学 河野純大）  
→自己の障害認識、ソーシャルスキル養成の機会の提供（報告・連絡・相談）
- ②聴覚障害学生の主体性を引き出す支援（筑波技術大学 宇津野康子）  
→情報保障支援をとおした直接的体験（意思決定→情報保障支援の実施→よりよい支援へ；主体的な関わり＝直接的体験

③体育は好きですか（筑波技術大学 天野和彦）

→体験・経験の圧倒的な貧弱さと積み重ね 「できない＝やったことがない」→「知らない」、「できない」との思い込み→低評価との連鎖につながる可能性

\*教職員 ○○に対する先入観（思い込み・わかたつともり）

→学生に思い込ませている・刷り込んでいる

④視覚障害の特性とキャリア発達支援（筑波技術大学宮城愛美）

→文字へのアクセス情報取得妨げの要因、媒体の電子化によって状況改善。字幕付きビデオ、テキストデータ変換（大学図書館と支援室の連携）著作権の 37 条

## FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大学教育学会
企画名称・テーマ	大学教育学会 2016 年度課題研究集会 学生はいかに学んでいるのか
開催日〈会場〉	平成 28 年 12 月 3 日 (土)～4 日 (日) ＜千葉大学西千葉キャンパスバスケやき会館＞
参加者 所属	歴史学部 歴史学科

### 参加報告

#### 【研修会の趣旨】

大学教育の質的転換が求められている中で、大学教育を学生の学びを支援する観点からとらえなおすとき、大学はどのようなべきなのか、多様な専門領域と教養教育を総合する大学教育において、学生の学び方や考え方を支援するとき、どのような共通の視点に基づいた議論ができるだろうか、という問題意識をもって「学生はいかに学んでいるのか」という統一テーマが設定された。

#### 【研修会の概要】

1 日目 (12 月 3 日) は統一テーマに関連する基調講演およびそれをうけた開催校企画シンポジウム、そしてポスターセッションが行われた。また 2 日目 (12 月 4 日) は、課題研究グループによる成果報告シンポジウムおよび STEM 教育に関するシンポジウムが行われた。出張者が参加したセッションにおいては、いずれもアクティブラーニングがキーワードになっていったと感じた。

アクティブラーニングといえば、とかくグループワークなどの共同学習やフィードバックなどの活動を伴う学習を行うことととらえがちであるが、それはあくまで手段であって、本来的なアクティブラーニングとは学生の学習活動が活性化されることなのではないか、ということが、今回の集会全体を通して確認されたように思う。

また教養教育・一般教育については、リベラルアーツ教育を伝統的に行ってきた国際基督教大学の事例 (森本あんり氏の基調講演) から、学生が潜在的に持っている様々な可能性 (学生自身が) 発見するための教育であり、それが専門教育とも密接に関連するのだと感じた。従って「専門が先か、教養が先か」という二者択一的な議論は、今後の学士課程教育の議論としてはあまり意味を持たず、学生がどのように学べば、大学の DP を達成できるのかという観点からのカリキュラム構築が必要なのではないかと感じた。

最後に、発達障害学生とアクティブラーニングについてである。障害者差別解消法の施行をうけて、各大学において様々な障害のある学生 (障害者手帳の有無にかかわらず) に健全学生と同様の教育環境を保障するために「合理的配慮」の実施が求められる。その際、学生支援体制の充実が求められるとともに、授業の面では特性故にグループワーク等に参加できない学生に対する「合理的配慮」をどのように行うのか、話題にのぼった。出張者としては、アクティブラーニングが、「手法」の問題ではなく、「学生の学習活動の活性化」を目的とするのであれば、それはグループワーク等に代る代替措置も可能なのではないかと考えた。

- \* コミュニケーション・情報リテラシー・記憶力
- \* 体験する・見よう見まねが困難 ・情報だけでなく実体験
- 正規の教育課程外の支援
- \* 卒後に向けた支援の例
  - ・ 点字指導 ・ 漢字学習の補講 ・ 資格試験 (IT パスポート等) の試験
  - ・ 歩行指導 (就職先選定のため) ・ 学外イベント等の参加支援
  - ・ 視力低下 (進行性) の精神的サポート

⑤ ① 一般大学における障害学生のキャリア発達支援 (山形大学 有海順子) 常日頃の意思表明支援がキャリア発達を促す

\* 学生の自己の言語化を促す (あなたの丸ごとを教えて: いろいろな対話) \* 学生の自己決定のための情報提供 (意思を尊重)

\* 他者や環境の理解と働きかけの促進

\* 支援利用者としての主体性の育成

\* 支援利用上のルールとマナーの指導 (ex. どうして遅刻するのだろう → 信頼関係を壊す

⑥ 4 つのグループに分かれて、参加者同士の情報交換

#### 【本学の FD 活動における検討課題】

FD の目標は、教職員が何かしらの改善 (授業や業務) を試みることで、学生により良い方向にもたらしことにある。この目標を前提とするならば、職員・教員ならびに部署間の連携は、印活動のみならず、特別なニーズがある学生への支援の影響にも左右するだろう。縦割り意識から、チームアプローチの発想が検討課題ではないだろうか。チームアプローチの発想を教職員自身が認識するためには、特別なニーズがある学生を知り、各部署がどのような協力支援ができるかといった研修が必要。

## FD 関連研修会 参加報告書

主 催	学校法人芝学園
企画名称・テーマ	渡邊海旭先生校長就任百周年記念事業第5回公開シンポジウム 「いのち」について考える
開催日＜会場＞	平成29年1月28日（土）＜芝学園講堂＞
参加者 所属	歴史学部 歴史学科

### 参加報告

#### 【研修会の趣旨】

当該集会名に示される記念事業の一環として、「いのち」をキーワードとして芝学園の教育理念ともかかわらせながら、教育改革および高等教育改革の問題が語られる。

#### 【研修会の概要】

基調講演の安西祐一郎氏の講演では、高大接続改革の意味を「いのち」の問題とからめて語られ、今次の高大接続改革が、予測不可能な時代を、子どもたちが主体性をもって生き抜く力を身に着けさせるためのものであること、そしてその改革がどのように進んでいくかを紹介された。

次のシンポジウム「社会で「生き抜く」力を大学で身に着けさせることができるか」では、金沢大学の高等教育開発関係教員（現職および元職）が、各人が実践している大学での「アクティブラーニング」（以下、AL）の実践例の紹介と、それを通じて学生・生徒が社会で「生き抜く」力を養成できているかをめぐって議論が行われた。特に野透氏の高校生を対象とした、大人教のAL型授業による自己肯定感醸成の授業、および身近な問題としての憲法議論から、自身の行動の自由と責任の問題に切り込んだ実践事例は、今後の授業運営に大いに参考になった。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

本学の次期カリキュラムにおいても、ALの手法を取り入れた授業が、積極的に推奨されるようである。

ただここで注意しなければならないのは、すべての授業をAL型に変えれば、確実に学生が予習・復習等で疲弊してしまうことである。従って、どの授業をAL型にするのかを慎重に考えなければならぬ。またAL型授業を多用すれば、必然的にCAP制を厳格に適用しなければならぬ。そしてALがどのような効果を生み出すのか、利点と問題点を教職員に周知しなければならぬ。

教学改革を通じてAL型授業を積極的に導入しようとするのであれば、教員個人の努力に負っている現状を改め、組織的にALについての情報共有を図っていく必要がある。そのためのFDは必須である。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

- 教養教育の性格と目的の確認、それを前提とした学士課程教育全体についてのカリキュラムの構造化（ナンバリング、カリキュラムマップ等）に関する勉強会
- 学習成果の評価方法（ルーブリック、GPA等）に関する勉強会
- アクティブラーニングとは何か？についての勉強会
- 学修支援の観点から見た学生支援のあり方の勉強会  
障害者差別解消法をうけた授業における合理的配慮の勉強会

・・・挙げればキリがない。

これまで以上のような研修会はたびたび行ってきたが、それが十分に浸透していないと感じるので、あえてもう一度提言させていただきたい。

## FD 関連研修会 参加報告書

主 催	京都大学高等教育研究開発推進センター
企画名称・テーマ	第23回大学研究教育フォーラム アセスメント・イン・アクションー評価の新しい形ー
開催日〈会場〉	平成29年3月19日(日)～20日(月) 〈京都大学吉田キャンパス〉
参加者 所属	社会学部 現代社会学科

### 参加報告

#### 【研修会の趣旨】

普段関わっている大学教育の枠組みを越えた様々な観点から、今後の高等教育における人材育成と評価における新たな可能性や課題について学び合い研究する機会であり、個人研究発表では大学におけるアクティブラーニング等の授業開発・カリキュラム開発、教育評価・大学評価、FD(ファカルティ・ディベロップメント)、IR/IE、さらにはITCの普及に伴うe-learningやMOOCs等の取組を通じ、各大学等で精力的に進められている実践的・実証的研究が扱われていた。加えて、最近の大学教育における重要課題やトピックを取り上げた小講演、参加者企画セッション(シンポジウム、ワークショップ、ラウンドテーブルなど)もあり、例年日本全国から800名以上の参加者が集まっている。

#### 【研修会の概要】

多くのセッションが同時に開催されていたため、個人研究発表ではアクティブラーニング/PBLをテーマとする発表を中心に見学した。個別の取組内容は様々であったが、「学部横断型の組織が中心となり大学全体として取り組んでいること」、「アンケートや成績評価等の数字を用いて実証的な成果の把握に努めていたこと」が共通していた。

個人研究発表会以外では、ボスターセッションの県立広島大学の取組が印象に残った。こちらは地元の新聞社と連携したものであり、新聞社のスタッフがかなり密接にプログラムの運営に関わっていた。まったく同じような施策を本学で展開できるわけではないが、アクティブラーニング/PBLのプログラム運営について地域の新聞社と連携することは大きなヒントとなるように感じられた。

また、特別講演は国立情報学研究所社会共有知研究センター長・新井紀子氏による「東大入試に迫るコンピュータから見えてくるもの」(略称:人口頭脳プロジェクト)に関するものであったが、「東ロボくん」についての発表そのものよりは、そこから派生した「そもそも学生は正しく読解力を身につけているのか」といった問題提起が興味深かった。結論として、「読解力が十分に身につけていない状態ではアクティブラーニング/PBLは効果的ではないのでは」という指摘があり、教員の立場からも同意できるものであった。なお、発表とほぼ同じ内容が以下の記事になっている。

「AI研究者が問う ロボットは文章を読めない では子どもたちは「読めて」いるのか?」

<https://news.yahoo.co.jp/by/line/yuasamakoto/20161114-00064079/>

#### 【本学のFD活動における検討課題】

以前の報告書にもまったく同じ内容を記載したが、京都大学での開催であり、市内の大学からの発表参加もあったため、当フォーラムにおける本学の存在感の希薄さが気になった。また、多くの大学では学部横断型の組織が中心となり、大学全体としてアクティブラーニング/PBLを推進している。多くの学部学科の偏差値が長期的に低下傾向にある本学において、こうした全学的に積極的にアクティブラーニング/PBLを推進している大学との教育の質の差が今後ますます広がってしまうことが危惧される。

2016 年度「教員研修会」・「FD 研究会」  
「学外 FD 関連研修会 参加支援」報告書

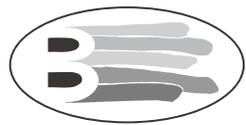
発行 日：平成 30 年 1 月 20 日

発行 者：佛教大学教育推進部教育推進課

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

TEL (075) 491-2141 (代)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>



BUKKYO UNIVERSITY